

URP 先端的都市研究シリーズ 24

創造都市における文化プロジェクトと  
担い手育成  
フランス・ナント市と京都市を例に

川崎 修良・越智 郁乃 編



## 先端的都市研究ブックレットシリーズの刊行に寄せて

本シリーズは、大阪市立大学都市研究プラザを拠点として取り組まれてきた先端的都市研究の成果や、それを踏まえた教育実践の成果を、多くの人々に共有していただくことを目的として刊行するものである。

都市研究プラザは、大阪市立大学が創設以来蓄積してきた「都市研究」の実績をもとに、2006年4月に開設された。「プラザ」という名称を付したのは、研究者だけではなく、都市において様々なまちづくりの実践に取り組む人々もそこに集い、相互に刺激を与え合い、新たなアイデアを産み出すことができるような「広場」としての役割を果たしていきたいと考えてのことであった。

その後、2007年度には、文部科学省が、我が国の大学の教育研究機能の一層の充実・強化を図り、世界最高水準の研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、もって、国際競争力ある大学づくりを推進することを目的として創設した、グローバル COE プログラムの拠点のひとつに選ばれた。そして、2007年度から2011年度までの5年間、文部科学省の財政的支援の下に、「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」をテーマとする研究拠点形成推進事業に取り組んだ。その成果を受け継いでさらに、2014年度には、文部科学大臣より「共同利用・共同研究拠点」としての認定を受けた。現在は、この認定を踏まえて、「先端的都市研究拠点」という名称を掲げ、全国の関連研究者のコミュニティが都市研究プラザを拠点として、大阪市立大学がこれまで蓄積してきた都市研究の知的リソースや人的・組織的ネットワークを活用し、最先端の都市研究に取り組んでいただけるよう、そのための基盤整備に努めているところである。

その一方で、研究者とまちづくりの実践に取り組む人々がともに集うことができる「広場」でありたいという都市研究プラザ創設の理念もまた、この間一貫して維持されてきた。この理念に基づく研究者とまちづくりの実践者との協働は、大阪市立大学のキャンパスにおいてのみならず、「現場プラザ」と名付けられたサテライト施設においても多彩に展開され、様々な成果を挙げている。また、ソウル、台北、香港、バンコク、ジョクジャカルタ等の海外の諸都市に設

立した海外センターや海外オフィスを拠点として、それらの諸都市を基盤として活動する研究者やNPO等との協働にも取り組んでいる。

社会に開かれた「広場」において、まちづくりの実践から学び、その成果をまちづくりの実践へと還元していくような研究を継続していくことこそが、大阪市立大学都市研究プラザが目指すところである。本シリーズの刊行も、そうした目的を実現するための取り組みのひとつである。本シリーズが、大阪のみならず全国各地において、まちづくりの実践に活かしていただけたならば、これに優る喜びはない。

大阪市立大学都市研究プラザ所長

阿部 昌樹

## はじめに

本冊子は、大阪市立大学先端的都市研究拠点共同利用事業・共同研究助成「創造的都市再生の試みにおける学生の包摂手法の研究：京都における芸術文化の創造性を活かした市民主導のまちづくりプロジェクトを題材に」（代表者：川崎修良）に関する研究の成果である。研究では、創造都市の重要な要素である芸術文化の創造性を活かした都市再生に向けて、その取り組みに学生が参画する事例を基に検証した。

創造都市は文化芸術と産業経済との創造性に富んだ都市の総称であり、その実現に向けて都市の様々な利害関係者の活動に創造性の文化を組み込むことが提唱された考えでもある。このような意味での創造都市を実現するには「文化芸術振興」「産業振興」「まちづくり・都市デザイン」などの分野をまたがる都市政策が必要であり、都市環境の整備だけではなく市民の考え方、彼らが機会と問題にどのように取り組むかが重要となる。学生の包摂に目を向けたのは、都市創造に向けたプロジェクトを通して新たな職能が発生し、その職能者が育つ視点に注目したからである。

それらを考察するための一つの事例として、フランス国ナント市が挙げられる。ナントは衰退した造船工業都市から文化芸術都市へのイメージ転換に成功した事例として知られる。日本では、ナント市における都市空間を活用した文化イベントや、産業遺構を活用した文化施設に着目されることが多いが、公共空間の創造的再生を意図して、舞台美術の技術であるセノグラフィ（仏語：scénographie）を都市に展開している点にはあまり言及されていない。舞台技術の視点を都市空間に応用する「都市のセノグラフィ」は国立建築大学においても公教育として成立し、都市空間を舞台とした文化プロジェクトを行うアクターを育て、活用する技法が洗練されつつある。

翻って日本では、都市に関わる市民活動の成熟については「まちづくり」の分野が当てられることが一般的であろう。まちづくりの用語が政策化する過程とその対象となる意味内容の変遷には注意する必要があるが、少なくともこれまで「文化芸術振興」と「まちづくり」の政策分野横断が十分に行われてきたとは考えにくい。例えば国土交通省が2017年に作成した『ま

ちづくりの担い手のあり方検討会』の取りまとめ」においては、民間まちづくり活動を推進する上で「人材」が最も重要と位置付けた上で、「まちづくり活動には、経営、広報、建築・不動産、財務会計、法務、税務等の幅広い職能が必要とされる」とする。列挙された職能から創造性を読み取ることは難しい。これまで行政職が担ってきた職能のアウトソーシング的な捉え方が行われてきたのが実情と思われる。

一方、2017年に成立した「文化芸術基本法」では、文化芸術に関する施策の推進にまちづくりを含めた様々な関連分野における施策との有機的な連携が図られるよう配慮するとされた。これは重要な変化である。既存の都市を前提としたまちづくりの定形化の議論が進められつつも、文化芸術の視点からもその意義が問われ始めているのが、今の日本の政策的な視点といえるだろう。

以上を踏まえて本研究では、個別都市や市民主導のまちづくりの事例から創造都市の担い手を育む取り組みを見出し、政策と市民双方が刺激を受けながら都市像を描けるような都市再生の手法を提起したいと考えた。具体的には、大都市の中でも学生の割合が高く早くから学生と地域を連携させたまちづくりの施策にも取り組んでいる京都市を対象に、芸術文化の創造性と都市再生の試みを結びつけた市民プロジェクトにおいて学生を包摂するプロセスとその意義の検証を行った。そしてその検証をもとに京都とナントの事例を比較しながら、創造都市の担い手育成に向けた議論を行うためにシンポジウムを開催した。

本冊子第一部には、2020年9月に京都とフランス・ナントをオンラインでつないだシンポジウム「文化プロジェクトと都市計画」の概要と、そこで行われたナントと京都の研究者・実践者の基調講演の一部を採録した。続く第二部には、シンポジウムでの議論や調査を基に論考を執筆した。創造都市の担い手育成の視点を持った、日本におけるまちづくりの新たな職能創出に向けて、本研究が一助になることを願う次第である。

川崎 修良

# 目次

はじめに 川崎修良

## 第一部 シンポジウム記録集

第1章 シンポジウム「文化プロジェクトと都市計画～京都の試みとフランス・ナント市の「過渡期の都市計画」の対話を通じた芸術祭の役割とその展望～」の概要

川崎修良 1

第2章 シンポジウム「文化プロジェクトと都市計画」基調講演①：  
ナントの文化的・都市計画的アイデンティティとなったセノグラフィ

Emmanuelle Gangloff（訳：高田裕輔） 5

第3章 シンポジウム「文化プロジェクトと都市計画」基調講演②：  
ナントのアートプロジェクトについての日本からの視座

川崎修良 17

## 第二部 論考

第4章 文化芸術による都市政策から公教育へ：  
フランス・ナント市における都市のセノグラフィ教育の実践

川崎修良 27

第5章 日本のまちづくり活動における担い手と学生の関係：  
京都における市民プロジェクトを題材に

川崎修良・越智郁乃 51

おわりに 川崎修良・越智郁乃 69





## 第1章

# シンポジウム「文化プロジェクトと都市計画～京都の試みと フランス・ナント市の『過渡期の都市計画』の対話を通じた

## 芸術祭の役割とその展望～」の概要

川崎修良

2020年9月25日にアンスティチュ・フランセ関西-京都を会場に国際シンポジウム「文化プロジェクトと都市計画～京都の試みとフランス・ナント市の「過渡期の都市計画」の対話を通じた芸術祭の役割とその展望～」(仏題: Comment imaginer la ville de demain ? Réflexions autour de deux expériences de projets culturels : Nantes et Kyoto) を開催した。新型コロナウイルス感染症の影響で国際的な移動が困難であったことから、日本とフランスの登壇者をオンラインでつなぎ、youtubeにてリアルタイム配信した。本節ではその内容を概説する。

### 1 シンポジウムの趣旨

フランス・ナント市では、衰退した造船工業都市から経済再生の梃子として1990年頃から文化芸術を活用し、公共空間での大規模な芸術イベントを奨励することで文化芸術都市として発展してきた。近年では都市再生と文化プロジェクトと融合させ、都市再開発の過渡期の段階に人々が参加するイベントを組み込む試みが行われている。このような手法はフランスにおいて「過渡期の都市計画 (urbanisme transitoire)」として注目されている。また、芸術祭のようなアートやイベントを都市空間に挿入し、都市のイメージの転換を図る試みを表す「一時的な都市計画 (urbanisme temporaire)」という用語も使われている。



## 2 プログラムと各公演の内容

### 2-1 第一部：フランス・ナントの文化プロジェクトと都市政策

シンポジウムの第一部は、基調講演としてフランス・ナントの文化プロジェクトが広く都市政策に影響を与えてきた視点を紹介した。二つの講演については講演者が補足のために加筆修正し、本冊子第2章、第3章として収録した。

#### 第一部の講演題目

1. 基調講演①「都市のセノグラフィの技法としてのナントの文化プロジェクト」エマニュエル・ガングロフ（グルノーブル・アルプ大学アルプ都市計画学・地理学研究所 PACTE 研究機関研究員及びナント国立建築大学 AAU-CRENAU 研究所研究員・オンライン）
2. 基調講演②「フランス・ナント市のアートプロジェクトについての日本からの視座」川崎修良（長崎県立大学）

### 2-2 第二部：京都の市民主導の文化プロジェクトとまちづくり

第二部では、京都の市民主導の文化プロジェクトの牽引役を担った方々に、それぞれの事例について講演いただいた。講演内容および、各プロジェクトについてのヒアリングを通して得られた考察を、本冊子の第5章に掲載した。

#### 第二部の講演題目

1. 「三条あかり景色プロジェクト」大島祥子（岡崎魅力づくり推進協議会 コラボレーター）
2. 「白川あかり茶の湯プロジェクト」川崎修良（白川あかり茶の湯の会 代表）
3. 「崇仁新町のプロジェクト設計」小久保寧（一般社団法人渉成楽市洛座 運営事務局長）

### 2-3 第三部：ディスカッション「文化プロジェクトと都市政策」

第三部では、第一部、第二部の内容を基に、登壇メンバー間でディスカッションを行った。冒頭に京都市都市計画局都市計画課の佐藤友彦氏より、第一部・第二部の議論を踏まえて行政官の視点からコメントと、第二部で紹介された崇仁新町エリアの再開発における行政課題と制度的な工夫について紹介をいただいた。ディスカッションを通して、文化プロジェクトと都市計画をどのようにつなぐか、さらには観光政策との関わりについて検討することで、これからの都市をどのように創造するか議論を深めた。

## 第2章

### シンポジウム「文化プロジェクトと都市計画」

#### 基調講演①：ナントの文化的・都市計画的アイデンティティ

#### となったセノグラフィ

Emmanuelle Gangloff（翻訳：高田裕輔）

#### 1 はじめに

私は、ナントにおける文化と都市計画のつながりについて発表したいと思います。これは、私の博士研究のテーマでもあります。「セノグラフィの手法が都市へと拡張される時」という題で論文を執筆しました。研究のフィールドはナントでしたが、ナントを選んだ理由は、「都市のセノグラフィ（scénographie urbaine）」と呼ぶべき取り組みがそこで展開し、この取り組みが都市の生成に影響を与える様を観察することができるからです。都市空間でのセノグラフィの出現は、都市の生成の新しい過程と捉えることができるのでしょうか。また、文化の分野と都市計画の分野がどう交差しているのか、一時的なプロジェクトが都市の生成に対しどのように永続的な変化をもたらすのでしょうか。この二点がこの研究に際しての問題意識でした。

研究は、ナント国立建築大学とアンジェ大学の共同プロジェクトの枠組みの中で実施しました。現在の私の立場についても軽く触れたいと思います。現在、私は都市計画、地域整備そして文化の分野の研究をしています。関心領域は、都市の生成、物語性、イベントに及んでいます。また、フランス内務省が立ち上げた国家プロジェクト「コロナ危機で社会がどう変容したかに関する調査」の中の都市の生成に関するプロジェクトの責任者を担っています。



写真 2-1 オンラインシンポジウムの様子(youtube 配信画像)



写真 2-2 講演スライド①,②

## 2 舞台都市ナント (写真 2-2)

私は都市、公共空間、そして公共空間を都市圏レベルで捉えることに興味を持って研究を進める中で、すぐにナントが興味深い調査地であると気付きました。それは次の二つの理由によります。一に、大規模な文化政策が30年以上に渡って展開されていること、二に一時的なアートの実践が都市圏の変革の核となっていることです。公共空間にアートを一時的に展開させることが、都市のアイデンティティの変化や、都市計画の手法の変化といった、都市の生成のベクトルに関わる要素に影響を与えているのです。

都市の空間、公共の空間、イベントの空間といった空間の重ね合わせの中で、解説すべき多くの論点がナントでは見受けられます。それは、セノグラ

フィの技術が一般的な美学の視点から扱われる側面を超えて、より広範な都市開発の問題に直面しているということです。私はナントという都市の生成について三段階の変化を指摘したいと思います。三つの段階は、アートの世界に留まっていたセノグラフィが、都市の分野へ展開していく役割の広がりに対応しています。現在、ナント都市圏で過渡期の都市計画（urbanisme transitoire）など文化プロジェクトの発展が顕著に見られますが、これは一時的な空間構想が、都市空間整備の問いと徐々に融合するようになった結果です。

### 3 ナントにおける舞台都市化の3段階の発展（写真 2-3）

ナントにおける舞台都市化の三段階の発展について紹介します。第一段階は、路上アートの芸術家たちが牽引することで、芸術家たちが理想郷を胸に抱きつつ、都市の架空の物語を作り出した時期です。1990年代、ナント市はアートの実験を展開しました。Royal de Luxe（ロワイヤル・ド・リュクス：編者註、第4章参照）に代表されるアーティスト達が都市を360度の舞台と捉えたアートの実践を行いました。この360度の舞台というのは、Michel Crespin<sup>1</sup>の言葉を借りたものです。都市に対しての新しい見え方をもたらす方法としてアート体験は評価されることとなります。

第二段階は、アーティストの手法を学んで制度が整えられる段階です。様々な文化の担い手がこの流れに追い付き、公共空間での活動を増加させました。各自のやり方でイベント空間が運営され、上演される中で、文化イベントに含有される雰囲気、都市に浸透していきます。

第三段階は、アートがナントの人々にとっての生活の一部となった段階です。アートに没入する体験が積み重ねられていく中で、使い手だけではなく住民、観光客も含めた様々な人々との関係性が重視されるようになります。空間の持つ意味を管理することが必要となり、オリジナルな都市の雰囲気

---

<sup>1</sup> ミシェル・クレスパン（1940-2014）。フランスの演劇人、舞台や公共空間のセノグラフィを手掛ける演出家、思想家、イベントデザイナー。

## CONTEXTE : Nantes, une ville scène

### Trois temps du projet

- Phase 1 : Utopie avec des artistes à l'initiative
- Phase 2: Institutionnalisation avec des phénomènes d'apprentissage
- Phase 3 : L'art comme mode de vie à la Nantaise



1992, Cargo 92



2007, Les Annexes de Nantes, Sierrade Estuaire



Les Machines de l'Île, Le Grand Éléphant

写真 2-3 講演スライド③

気とは何かが問われます。

このような変化の中で、都市のセノグラフィの手法を用いて都市の生成を志向する新たな行動様式が生み出されました。そこでは、イベントを都市の日常の中に存在させるために空間を管理することが不可欠となります。ナントは文化イベントを発展させていく中で、「見られる舞台としてのまち」であったのが、「住まう舞台としてのまち」になり、やがて「ともに作り出す舞台としてのまち」へと変化して来たのです。

#### 4 都市のイメージを変えるために、都市の物語を作ること

ナントでは造船所が閉鎖された後、どのように都市再生を行うか問われ



ました。徐々に、路上を舞台とするアーティストたちによって、使われなくなった産業遺構が不定期に使用されるようになります。アーティストは都市に対する新しい見方を提示します。散発的に現れるショーやイベントの時間に都市が舞台となり、芸術的な表現が付け加えられることで、街は別のものへと変わります。街はアーティストの物語を支える存在となります。このようにちょっとした瞬間の積み重ねが、日常空間を純粋な機能の面から見ていた人々を解き放ちます。Les Allumées（レ・ザルメ：編者註、第4章参照）のような芸術祭やアーティストのインスタレーションは共通の記憶を作り、その都市特有の物語を構築するのです。

ロワイヤル・ド・リュクスは、路上演劇 *La saga des Géants*（編者註：「巨人の伝説」、第4章参照）を通して、都市の物語の担い手となっていきました。芸術家だけではなく文化活動や都市計画の関係者たちも、パフォーマンスによって生まれたイメージを固定化し、象徴的な要素を掛け合わせることで、都市の詩的な時間の記憶を永久に残そうと試みるようになりました。ナント島に常設の施設であるマシン・ド・リルが作られたことは、一時的なものが恒久化した代表例と捉えられるでしょう。機械仕掛けの象は様々な場所で活躍し、最終的には都市の新たな象徴となります。新しい無形遺産が展開されたのです。同じ過程が、*Le Voyage à Nantes* という芸術祭でも窺えます。例えば、ロワール川沿いに設置された作品“*Les Anneaux de Buren*（「ビューレンのリング」）”をはじめとし、芸術祭で展示された数多くの作品が現在のナントの景観を語る上で欠かせないものとなっています。

文化セクターの関係者たちは、自分たちの住み慣れた劇場やギャラリーの“壁”を乗り越え、都市の中でイベントを企画し、人々の中に飛び込んで行きました。彼らは公共空間での活動を通して都市の共通の物語を生み出す過程に加わり、都市の生成に貢献します。都市計画家たちもまた、イベントの企画者となり、過渡期の都市計画のプロジェクトを後押しします。ナント、とりわけナント島では、都市の荒地地となっていた産業遺構が「占拠」されることで、人々は地域が変わり都市が建設されていく過程を目にするようになりました。一時的な空間の設置は本質としてコミュニケーションの価値を持つのです。このような文化プロジェクトによって都市性が作られ、都

市の新たなイメージが形成されるのです。

今日、ナントでは、感覚の空間と機能の空間との間で、都市の物語が作り出されています。アーティストたちの動きに啓蒙されて、行政官や開発者は都市計画にも文化にも根を持つ機能を掛け合わせるようになりました。物語作りは、アーティストだけによって担われるものではなくなっています。都市そのものも、物語の担い手となりつつあり、アーティストは肉付けのために動員される側にまわっています。都市的行為と文化的行為が同時に行われています。このことは、住民に与えられる役割を更新して行きます。観客であると同時に、担い手でもあり、作り手でもあるものへと変わってきています。

## 5 公共空間のセノグラフィ的管理と、都市の運営に於ける新しい技能(写真2-4)

アーティストの紡ぐ物語は、都市のイメージの生成に寄与します。様々な地方公共団体がこのノウハウを学び、定着化させるために模索を行なっています。文化セクターの関係者は、公共空間を活用する手法を多様化させました。彼らは、都市と様々な芸術的提案の間を取り持つ役割を果たしています。そしてそれに留まらず、彼ら自身も公共空間でのプログラムを企画するようになっていきます。文化セクターだけではなく、市の全ての部局がこの問題に敏感になっていると言ってもよいでしょう。現在、ナント市の緑地環境局は仲介役を果たすとともに、自身も公共空間でのプログラムを企画しています。さらに、イベントが開催されることを踏まえた空間コンセプトの設計や、開発時に都市の物語を参照するような視点を持つようになっていきます。緑地環境局のイベントにおいても、試行的に空間をつくり、使われ方を実験し、与えられた時間の間空間に活気を与えるセノグラフィの視点がとりいれられています。

ここで文化イベントの企画者は、都市の演出家=セノグラファーとしての機能を果たしていると言えます。セノグラフィの技法を都市に応用するこ

## ANALYSE / une gestion scénographique de l'espace public



2004, Jardins à David Pezobrau, Les Fenêtres

Les fonctions scénographiques :

- rapport au réel/ fiction
- gestion espace/temps
- relation œuvre/public

### • L'acquisition de savoir-faire



2008, Le Espace-Lavoir Quai Cuvier, Les Fenêtres

### 写真 2-4 講演スライド④

とで、より感覚に基づいたオリジナルな都市を創造する想いを持った、都市づくりの新しい手法がもたらされることとなります。都市の演出家は次の三つの役割を担います。一に、現実と物語との間の仲介役として都市を語り、その語りを地域に落とし込む役割です。二に、空間と時間との間の仲介役として一時的なイベントを管理しながら、日常の都市の機能との調整を行う役割です。最後は、作品と人々の間の仲介役です。

## 6 一時的な取り組みを恒久化し、実験的取り組みを制度化する（写真 2-5）

これまでナント市では、アーティストの公共空間での活動展開を支援し、活動の促進を行う体制が整えられてきました。また、一時的なものを恒久化

## ANALYSE / un processus d'expérimentation qui s'institutionnalise



Trévoux, Aurélien Bory, La Voyage à Nantes

Evolution des publics visés,  
quelles implications pour l'habitant ?

Pérennisation et phénomène de  
routinisation



写真 2-5 講演スライド⑤

させようとする動きも見られ、都市の生成の様々な関係者が一時的な手法を試行し、それを継続させる可能性の検証が行われています。

市の機関はイベント企画に慣れてきましたが、ここで注意しなければならないのは、アーティストの居場所を確保し続けるということです。というのも文化イベントが制度化していく過程で行政が演出家の役割を担ってしまうと、セノグラフィの持つ一時性・実験性が失われ、行き詰まる可能性があるからです。考えられる危険性は、緊張感を生み出すアーティストが不在の中で取り組みが進められることです。我々がアーティストに求めていたはずの摩擦や衝突が欠けると、都市づくりのプロセスから芸術的な創造性が遠ざけられ、ディズニーランド化する中で損なわれ、最終的に本質的ではない試みに堕ちてしまう可能性があるのです。

## 7 対象となる大衆の変化。住民にとっての関与とは。(写真 2-5)

また、住民とアートとの関係も変化します。住民はアートとの関わり方を様式化し、アートからの眼差しに慣れていきます。まちの中にアートが溢れるということは、ナントの人にとって、アートが生活の一部になるということです。しかし、この手法には問題もあります。作品と人々と地域との関係について投げかけられた問いは、作品の存在が当たり前になる中で消えてしまう可能性があります。公共空間に風変わりな作品や芸術的な提案が遍在することで、人々と作品の間の緊張関係が和らぎ、作品が日常生活の中に埋没してしまう可能性があります。対象となる人々の増加の中で、住民の関わり方について新たに問うべき段階にきています。

## 8 継続する一時性。地区を事前形成するための過渡期の都市計画プロジェクト (写真 2-6)

文化イベントを考慮しつつ、都市空間をセノグラフィによってマネジメントしていくことは、今や地域開発や都市計画の手法の一つとなっています。数年前から、Transfert (トランスフェー：編者註、第4章参照) に代表される文化的都市計画、すなわち過渡期の都市計画プロジェクトが、ナントの様々な地区で展開されるようになりました。これらのプロジェクトには、かつて都市の荒地地であった現在開発中の空間などが用いられ、文化イベントや活動を通して物語が生成される中で、将来の都市整備の可能性が示されます。ナントが今考えなくてはならないことは、どのように物語を更新するか、そして新しい都市性を地域に積み重ねていく手法をどのように作り出すかです。

## ANALYSE / Vers des projets d'urbanisme transitoire/culturel pour préfigurer des quartiers



Des projets tels que « Transfert »  
se développent



La Cobra, avenue de Transfert



2018, Transfert rue du Loif

写真 2-6 講演スライド⑥

### 9 おわりに：アーティストは都市を開かれた舞台にするための中心的な存在と言えるのか？（写真 2-7）

まとめると、ナントの事例が教えてくれることは、アーティストが都市の生成に組み込まれるためには、都市計画と文化政策の双方の分野でのやり方を変える必要があるということです。そのために必要なプロジェクトは地域によって異なります。何故かという、方法や過程が都市の歴史と深く関わってくるからです。ナントの事例はまた、実践が制度化されてしまうというある種の限界も示しています。具体的に言えば、提案が全て同じようなものになってしまう危険性です。また、*le Voyage à Nantes* の文化芸術プロジェクトはナントの人にナントを再発見してもらいたいという想いのもと生



写真 2-7 講演スライド⑦

まれたものですが、現在では世界的な都市間競争という文脈と、住民をどう巻き込んでいくかという文脈の中で、対象となる観客は誰かという問いが生まれています。

疑いなく言えることは、都市の未来を考えると最大の論点の一つが、都市それぞれが個性を持つためにアーティストを中心に据える方法を考えるべきだということです。もしセノグラフィがアーティスト以外によって担われる場合、芸術的な創造性を軽視する傾向がわかってきました。空間のセノグラフィを用いた運営は、アート創作を重視する開かれた舞台としての都市圏の環境を作り出しますが、もしセノグラフィが日常化し、反復に陥った時、また公共空間の中で見えにくいものとなった時に、舞台は死んでしまうでしょう。都市の空間は、機能的な場であるとともに、都市性の生成に

必要な、共有と共生の空間の出現に貢献するものでなくてはなりません。

芸術的創造によって具現化された舞台が存在しなくなってしまうと、舞台は偽物のデコレーションとなり、遺物化してしまうでしょう。ナントの事例が教えてくれることを再度強調しますと、都市計画と文化プロジェクトの融合こそが、都市性を作り出し、独自の雰囲気を作る源となり、魅力の発信源となるのです。今、コロナ危機が世界を覆っています。我々の公共空間との関わり方にも影響が出て来ています。この危機の時代に、都市が開かれた舞台であり続けるための手法をどのように維持していけば良いでしょうか。



## 第3章

### シンポジウム「文化プロジェクトと都市計画」

#### 基調講演②：フランス・ナント市のアートプロジェクトにつ

#### いての日本からの視座

川崎修良

#### 1 はじめに

長崎県立大学の川崎と申します。私からは日本から見たフランス・ナント市のアートプロジェクトと都市計画という視点で、Gangloff さんの話を補完させていただきたいと思います。今回、このようなシンポジウムで京都とナントの事例を対話させたいと思った背景として、両都市ともに文化プログラムによる政策横断的な都市再生が起っています。そこで、両都市でプロジェクトが進められていくプロセスとして異なる点を提示することで、改めて今後の都市像をどう描くか考えることを意図しました。

#### 2 ナントの都市再生の特徴

まず、ナントという都市にはその中で活動するアクターである芸術家とそれを楽しむ市民が住まい、その舞台装置として都市が生成しているという視点が興味深いです。セノグラフィは直訳すると舞台美術ということですが、そこには動的なものを主役に捉えて、主役を引き立てるための装置を配していく考えがあると思います。先に講演いただいた Gangloff さんはナントの試みを「都市のセノグラフィ (scénographie urbain)」と呼んでいます。実際にそのような視点を持って都市を見つめている様子がナントからは感じ取れます。

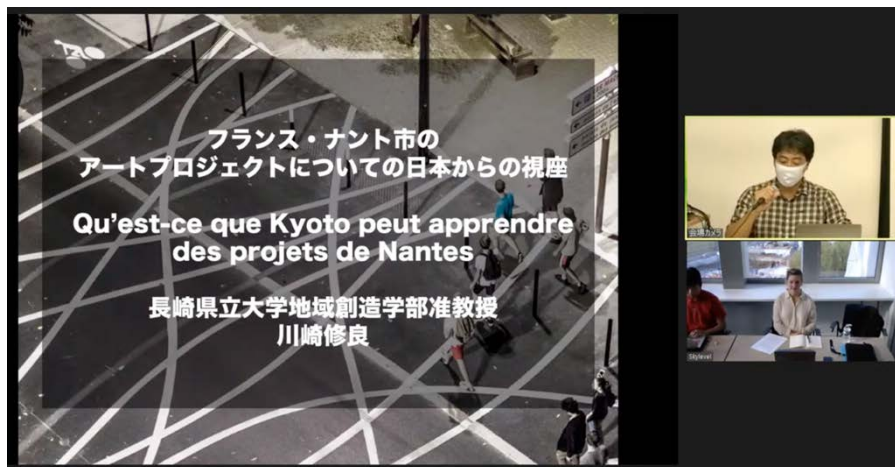


写真 3-1 オンラインシンポジウムの様子(youtube 配信画像)

Gangloff さんからは主に都市のアクターの視点からお話を頂きましたが、政治においても文化が都市を牽引する流れが作られてきたこともポイントだと考えます。1989年にナント市長となった Jean-Marc Ayrault (ジャン＝マルク・エロー) は様々な芸術的イベントをナントにもたらしめます。

Gangloff さんからもご紹介いただいた Royal de Luxe (ロワイヤル・ド・リュクス) の野外劇(写真 3-2) など実際の都市空間における文化プロジェクトがありますが、こうしたアトラクション集団が所在することが都市再生の方針にも影響を与えます。造船所のドッグの跡地は写真の巨大象をはじめとした機械群の展示場と、機械を制作するアトリエに改装されました。周辺の敷地は機械仕掛けのアトラクションを備えた都市公園となり、現在のナント島のシンボルとなっています。このような都市再生には、ナント出身の作家ジュール・ヴェルヌの小説に登場する機械(挿絵 3-3) もモチーフになっています。

他にも、公教育の分野にもその影響があります。Gangloff さんが研究員として所属するナント国立建築大学では、建築、都市、風景などが劇場や映画と共通であるという考えに基づいたセノグラフィ教育を 1999 年から導入し



(左)写真 3-2 ロワイヤル・ド・リュクスの 2005 年アミアン公演(出典:wikipedia(CC BY-SA 2.0)),(右)挿絵 3-3 Jules Verne の小説 “La Maison à vapeur”に登場する象の形をした鋼鉄製蒸気機関車の挿絵(出典:wikipedia(PD))

ています。セノグラフィの専門教育を行う公立学校はフランス国内に複数ありますが、建築学の学位資格を取得できるのはこの1校のみです。都市再生の手法と、その都市における建築学の教育が密に関係していることは、その都市の文脈での都市再生の担い手が公的に育成されているということになります。

### 3 京都の芸術祭ニュー・ブランシュ京都とナントの関係

さて、ナントで進められた文化政策、実際の都市空間における文化プロジェクトが一つのフェスティバルの形に結実したのが、京都では2011年から行われているニュー・ブランシュ京都であり、ナントでは2012年から行われている *Le Voyage à Nantes* (ル・ヴォワイヤージュ・ア・ナント:「ナントへの旅」の意、以下LVANと記載)とすることができるでしょう。

ニュー・ブランシュ京都はパリで2002年から実施されている芸術祭 *nuit blanche* (ニュー・ブランシュ:「白夜」の意)の考え方を輸入したプロジェ

クトです。nuit blanche の初代芸術監督はナントで 30 年にわたって様々な文化プロジェクトの芸術監督を務めてきた Jean Blaise (ジャン・ブレーズ) でした。

ブレーズは 1990 年から 1995 年にかけてナントで実施された深夜の芸術祭 les Allumées (レ・ザルメ:「点灯」の意) にて、アートの場所とは考えられていなかった荒れた産業遺構を活用したプログラムを成功させました。その後、2001 年にパリ市長となったドラノエ政権によってブレーズが招待され、パリにおける夜の芸術祭 nuit blanche が実施されました。

ナントにおいては、2007 年から 2012 年にかけてナントと港町サン=ナゼール (Saint-Nazaire) を結ぶロワール川沿いにアートを配する Estuaire (エスチュエール:「河口」の意) のプログラム、2012 年からはナント市街の様々な場所にアートを配する芸術祭 LVAN が行われます。これらのプログラムの芸術監督もブレーズです。LVAN とニューイ・ブランシュ京都は親戚関係にあるプログラムと言っても良いかもしれません。

#### 4 都市の中に文化プログラムを挿入する手法の政策横断性

LVAN はその展示の中で都市開発された場所に人々を誘う機能があります。写真は、2012 年及び 2019 年の芸術祭の展示企画の場所を巡る一つの推奨コースとして事務局が設定した経路を地図に落としました (図 3-4)。年度を経て経路が拡張していることが見て取れます。この経路は実際に街の路上に緑色の線 (写真 3-5) として描かれ、その線は今では芸術祭のシンボルになっています。まず、このような線が道路に残せることが日本からすると面白い。芸術監督のブレーズは「緑の線は元々関係ない場所をつないで全体として統一を図った、観客のための便宜的なもの」と述べています。

しかし、回を重ねるにつれて緑の線にも行政セクターを横断するような機能が生まれています。2012 年と 2019 年の線の広がりを見ると、芸術祭の作品の誘うエリアが、ナント市の都市開発に目を向けさせるように誘導す

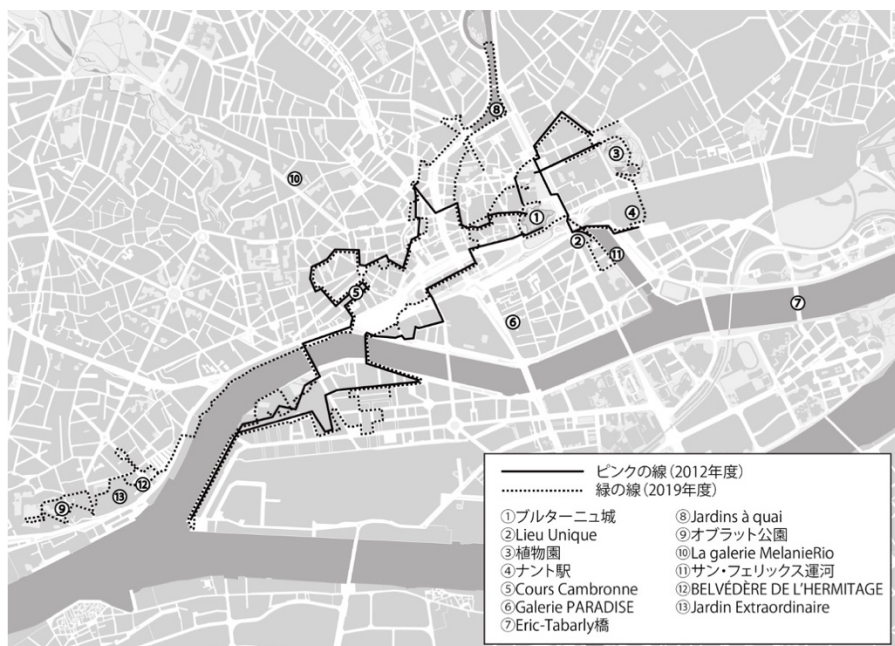


図 3-4 le voyage à nantes パンフレットに示された推奨ルートの変化(筆者作成)

る機能を持っていることが見えてきます。

拡大したエリアの特徴を見ていきます。まず地図右上のナント駅ですが、ナント駅とその周辺の開発プロジェクトが進められています。最終的には南北をつなぐ機能を駅に持たせる計画ですが、2019年までに周辺地域の整備が完了しています。地図左下のサン＝フェリックス運河（Canal St.Felix）では、2018年に再開発計画が発表され、同年の芸術祭では川と道路の境界をつなぐ視点のアートが配されました。

地図上部のエルドル川（L'Erdre）に芸術祭のルートが拡張した背景には、ナント市緑地環境局（Service des Espaces Verts et de l'Environnement）のプロジェクトが関係しています。2013年にナント市が欧州緑の首都（European green capital）に採択されたことを機に、かつての船溜りを浮島により緑化するプロジェクトとこれを眺める船を模したレストランが整備され、以降



写真 3-5 路上に引かれた緑の線が芸術祭の展示作品へと誘導する(筆者撮影)

船溜りでの緑化プログラムがイベントとして毎年行われています。

地図右下の採石場跡地では新たな緑地公園と街区の開発が進められています。「7つの展望台のある散歩道」のコンセプトで開発が進められる中、芸術祭の作品としても展望台が設置されました。ナント広域都市圏開発局による街区再開発、ナント市緑地環境局による庭園開発、芸術祭事務局による恒久的なアート設置などが並行して行われています。

都市の中に文化プログラムを挿入する手法は、芸術祭だけではなく、ナントの都市再開発のセクターでも取り入れられています。写真 3-6 は LVAN 開始の翌年 2013 年に、ナント島の再開発を手がける地方公共会社 SAMOA によって実施された、“parcours green island (緑の島の経路)” のパンフレットです。ナント島の再開発の新しい方法を検討するために実施された、デザイ





www.parcoursgreenisland.com

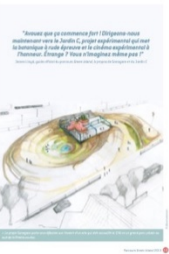


写真 3-6 parcours green island パンフレット(一部抜粋)

ナー、建築家、造園家、芸術家、学生等が参加した公共スペースでの 12 の実験プロジェクトです。開発予定地に様々な文化プロジェクトを配置して人々を誘う企画には、これまでの文化セクターの取り組みの影響が見て取れます。

このように、文化政策を通して洗練されてきた人々を場所に誘導する手法が、緑地環境を担う部局や、都市再開発を担う部局など、様々な行政セクターの取り組みと関係性を持って機能しています。

### 5 都市計画の技法としての文化プログラム

LVAN は挑戦的な一例であると思いますが、都市開発の過渡期に文化プロ

グラムを挿入することで、その後の開発の方針に影響をもたらすような取り組みが、2010年ごろからフランスで注目されています。これは過渡期の都市計画、フランス語で“urbanism transitoire（ユルバニズム・トランジトワール）”と呼ばれています。2018年には公的機関であるパリ地域研究所（l’Institut Paris Region）が実践書を作成するなど、この技法は一般的に受け入れられつつあります。

他に一時的な都市計画、刹那的な都市計画などの呼び方もありますが、ニュアンス的には文化プログラムの終了後の影響をどの程度意識しているかによって使い分けられているようです。社会学者の Benjamin Pradel によると<sup>2</sup>、過渡期の都市計画（urbanisme transitoire）は建物の解体後、再開発が始まる前の空き地、古い道路や社会住宅、公共の場所などを暫定的に居住者が利用できるようにする取り組みで、プロジェクトを通して明らかになったニーズを統合し、最終的な都市プロジェクトに実際の影響を与えることが意図されています。一時的な都市計画（urbanisme temporaire）は地域づくりの戦略に関連させ、長期的な空間変換を視野に入れた短期的な実践で、将来の再開発への影響は意図されていません。刹那的な都市計画（urbanisme éphémère）はイベントによるお祭りのような空間占有により、建物と公共空間、私用空間の使用のロジックを変換させる試みとしています。éphémère は日本語の「切ない」というような情緒的なニュアンスを持つ言葉です。

## 6 おわりに

以上、ナントの取り組みを見ていくと、まずエロー市長の強力なイニシアティブがあり、政治的な都市政策のビジョンがあってそのための手法として文化セクターによる文化プログラムが展開されました。とりわけ文化プ

---

<sup>2</sup> リヨン大学のプログラム“École urbaine de lyon”に掲載されたテキスト“L’urbanisme temporaire, transitoire, éphémère, des définitions pour y voir plus clair.”（2019年12月12日）を参照した（<https://medium.com/anthropocene2050/lurbanisme-temporaire-transitoire-%C3%A9ph%C3%A9m%C3%A8re-des-d%C3%A9finitions-pour-y-voir-plus-clair-4a94f7916dfb>）。



プログラムが牽引する形で都市のビジョンが共有され、各々の行政セクターともつながる横断的な都市開発が動き始めているのではないかというのが私の仮説です。

さて、翻って京都を見ると、市民セクターの自発的な活動であるまちづくりにおいて、都市空間のイメージを変えるような意図をもって取り組みを行ってきた事例があります。本日のシンポジウムの第二部では、実践者の視点で3つの市民主導の文化プロジェクトを紹介していただきます<sup>3</sup>。

一つ目は「三条あかり景色」です。三条あかり景色は京都の三条通で2004年から2006年にかけて、同エリアの夜の賑わいに乏しいという市民の課題意識から実施された街区のライトアップイベントです。当時はまだ一般的ではなかったプロジェクションマッピングが試みられています。

二つ目は「白川あかり茶の湯」です。琵琶湖疏水から分水する白川は、かつての流路に運河が挟まった人工的な河川で、水量が安定していることから水利を活用した産業も生まれ、2015年には「京都岡崎の重要文化的景観」のエリアの一部に指定されました。白川あかり茶の湯は、白川の親水性の高さを再評価しようとする地域住民や学生の試みからはじまり、川の中に設けられた茶席で来訪者をもてなす京都らしい取り組みに展開しています。

三つ目は「崇仁新町」です。市民主導のプロジェクトである前二つに対し、崇仁新町は民間企業が行政に提案して実現させたプロジェクトです。京都市立芸術大学の移転予定地である京都市保有の遊休地に2018年の2月から2年半の時限的な屋台村が設置されたもので、プログラムの運営や企画に芸大生が参加しています。フランスで試みられている過渡期の都市計画の考え方に非常に近い実践事例であると思います。

以上、第一部でのナントの事例の紹介と、第二部での京都の三つのプロジェクトの紹介を踏まえ、第三部の都市計画と文化プロジェクトの関係についてのディスカッションにつなげたいと思います。

---

<sup>3</sup> 本冊子においてはシンポジウム第二部の講演内容の掲載に代えて、三つのプロジェクトの学生包摂のプロセスを取りまとめた論考を第5章「芸術文化の創造性を取り入れたまちづくり活動における学生包摂とその意義：京都における市民プロジェクトを題材に」として掲載する。



## 第4章

### 文化芸術による都市政策から公教育へ：

#### ナントにおける都市のセノグラフィ教育の実践

川崎修良

##### 1 はじめに

都市創造に向けた文化プログラムを通して新たな職能が発生し、その職能者が育つ視点を提起する一つの事例として、フランス国ナントの取り組みが挙げられる。ナントは1980年代後半からの政策によって衰退した造船工業都市から文化芸術都市へのイメージ転換に成功した都市であり、創造都市の事例として取り上げられることも多い。創造都市としてナントが語られる中であまり言及されないのは、公共空地を創造的空間として再生させる野外演劇の視点と並行して、舞台美術の技術を都市空間に展開させる「都市のセノグラフィ (scénographie urbaine)」の視点が萌芽し、これがナント国立建築大学 (l'École Nationale Supérieure d'Architecture de Nantes : ENSAN) において公教育として成立している点である。

演劇由来の空間演出の技法であるセノグラフィの概念は、Royal de Luxe (ロワイヤル・ド・リュクス) の野外演劇 (ストリートシアター) や、公共空地を活用した芸術祭、ナント島の再開発など、ナントにおける様々な取り組みを通じて、都市を空間と時間の混合体として捉えてデザインする技法化が進められ、これを新たな都市計画の技法として捉える動きが見られるようになった<sup>1</sup>。本稿では、ナントにおける都市のセノグラフィ教育と実際

---

<sup>1</sup> 現在フランスにおいて公的な都市開発に取り入れられつつある「過渡期の都市計画 (urbanisme transitoire)」、すなわち都市開発の過渡期の段階に人々が参加するイベントを組み込む技法の成立に、ナント市での取り組みは関係している。ナントの取り組みと urbanisme transitoire の関連性については、越智・川崎(2020)に詳しい。

の都市政策の関わりを手掛かりに、担い手育成の側面から創造都市のあり方を考察する。

## 2 ナントにおける文化芸術の担い手の導入

### 2-1 創造都市としてのナントの特徴：造船都市から文化芸術都市への転向

ナント市は、フランスでも前例のない文化芸術による都市政策を進めてきた都市である。歴史的にはブルターニュ地方であったが、現在はペイド＝ラ＝ロワール地域圏 (Pays de la Loire) の圏都であり、ロワール＝アトランティック県 (Loire Atlantique) の県庁所在地である。「ロワール川沿いに位置し、18世紀の奴隷貿易による舟運業で急激に発展したこの都市は、1980年代に造船所が閉鎖された後、経済的に衰退した。80年代後半に市が経済発展の梃子として文化芸術を活用し、公共スペースでの大規模な芸術的イベントの開催を奨励した。この取り組みは以降のフランスの都市政策において参照され、リヨンやル・アーヴル等の都市で公共スペースを用いた芸術祭が開催されるようになった<sup>2</sup> (越智・川崎 2020:56-57)」。ナント市はこのような取り組みを通じて、衰退した造船工業都市から文化芸術都市へのイメージ転換に成功した。

創造都市政策としてのナントの一つの大きな特徴は、「市民を動かす力を持った芸術創造を地域に根付かせる都市文化政策への希求 (長嶋 2018:185)」に端を発することである。ナント市で1983年に起こった政権交代、左派の敗北によって、当時設立が進められていた文化センター (Les Maisons de la culture) への助成が打ち切られ、ナント都市圏の左派自治体連合による公設法人「文化開発研究センター (Centre de recherche pour le développement

---

<sup>2</sup> リオンでは19世紀に始まった Fête des Lumières を1999年以降、4日間にわたる光の祭典とし、通り、広場、象徴的な建物等のライティングにアーティストを参加させることで数百万人の来訪者を呼び寄せることに成功した。ル・アーヴルでは2017年に開港500年を祝いイベントとしてジャン・ブレーズを芸術監督に据え、公共スペースを展示空間とした芸術祭「ル・アーヴルの夏 (Un Été au Havre)」を開催した (越智・川崎 2020)。

culturel : CRDC)」の設置の動きが起こる<sup>3</sup>。その中核的役割を果たしたのが、ナントの西の郊外に位置する基礎自治体（コミューン）サン＝テルブラン（Saint-Herblain）の当時の首長で、後の1989年にナント市長となるJean-Marc Ayrault（ジャン＝マルク・エロー）<sup>4</sup>であり、CRDCのディレクターを務めたのがその後ナント市の様々なプロジェクトで芸術監督を担うJean Blaise（ジャン・ブレーズ）である。CRDCは1986年から1995年にかけてサン＝テルブランのグルヌリ城（Château de la Gournerie）を活用した演劇祭“Le festival de la Gournerie”を開催する。この演劇祭のプログラムには野外演劇劇団のロワイヤル・ド・リュクスも名を連ねている。エローはナント市長になった1989年にロワイヤル・ド・リュクスのナントへの移転を実現させた<sup>5</sup>。その後のロワイヤル・ド・リュクス及び、及び、その元メンバーによって設立されたLa Machine（ラ・マシーン）とManaus（マナウス）の三つの協会によって現在の文化芸術都市ナントの象徴となるようなプログラムが実施されていく。

## 2-2 ロワイヤル・ド・リュクスの野外演劇と都市イメージの形成

ロワイヤル・ド・リュクスの野外演劇では、ひとつのストーリーに沿って動物や巨人などの巨大な人形が町中を練り歩く。ストーリーは事前に公表されず、ひとつのストーリーが数日間にわたって上演される。移転後の1993年には都市のスケールを舞台とする演劇La saga des Géants（「巨人の伝説」

---

<sup>3</sup> ナントに隣接するサン＝テルブラン、ルゼ（Rezé）、サン＝セバスティアン＝シュール＝ロワール（Saint-Sébastien-sur-Loire）に、約六十キロメートル離れたサン＝ナゼール（Saint-Nazaire）、そしてラ・ロッシュ＝シュール＝イオン（La Roche-sur-Yon）を加えた左派五自治体が、84年10月に文化事務組合を結成し、CRDCを共同運営する体制を整えた（長嶋 2018:184）。

<sup>4</sup> エローは1989年から2012年までナントの市長を務め、その後オランダ政権で首相になった。

<sup>5</sup> ロワイヤル・ド・リュクスは1979年南仏のエクサンプロヴァンスで設立され、1984年にトゥールーズへ移転した。その後、1989年にトゥールーズがロワイヤル・ド・リュクスに対する財政援助を認めなかったため、ロワイヤル・ド・リュクスは全国紙で訴えを行った。その年、新たにナントの市長に選出されたエローが助成金と格納庫の敷地の提供を約束し、10月にロワイヤル・ド・リュクスはナントへ移転した（Gangloff 2017:225-226）。

## Nantes visitée à pas de géant



Un moment de grande joie à Nantes où le géant a été visité par une foule de spectateurs venus de toute la région.

Le géant de Nantes a été visité par une foule de spectateurs venus de toute la région. Le géant de Nantes a été visité par une foule de spectateurs venus de toute la région. Le géant de Nantes a été visité par une foule de spectateurs venus de toute la région.

Les visiteurs du géant ont été très nombreux et ont pu profiter de la vue de la ville de Nantes. Le géant de Nantes a été visité par une foule de spectateurs venus de toute la région.

### 写真 4-1 新聞記事“Nantes visitée à pas de géant(ナントを訪れた巨人の足音)”

(出典: Ouest France, 1994年 提供: Emmanuelle Gangloff 氏)

の意) がル・アーヴルで、翌年1994年にはナントにおいても上演された(写真4-1)。その後La saga des Géantsは2018年まで世界の様々な都市で上演される。ナントでは1994年の後、1998年、2000年、2005年、2011年、2014年に上演が行われている。

1998年の2度目の上演に先駆け、1997年にはナント市の文化開発局に公共空地での上演をサポートする体制が整えられるなど、行政制度の整備も進められた。Gangloff (2016) によると、1997年に劇場と同様に公共空地でイベントを行うために必要な技術的・安全的な条件を整える「シティマネージャー」として、技術管理責任者が文化開発本部に配置され、イベントをサ

ポートするために都市を劇場化するための物流のコーディネートが行われるようになった（Gangloff2016a:49）。

Gangloff（2017）は、ナントにおいて都市の物語や都市のスケールに適用された演劇的手法が展開したことで、人々の感情を喚起しようとするイメージの無形の遺産が構成され、都市計画における繊細な場所について、都市を作っていくアクターたちに問いかけることが可能となったと指摘する（Gangloff2017:247）。その後、実際にナント市の文化政策やロワイヤル・ド・リュクスの活動から展開した様々な文化プロジェクトがナント市の都市再開発や緑地景観行政、そして観光行政や公教育にも影響を与えることになる。

### 3 文化プロジェクトの多様な都市政策への影響

#### 3-1 都市再開発への波及

ロワイヤル・ド・リュクスで用いられた巨大な機械仕掛けの人形の演出は、現在のナント島のシンボルとも言える機械仕掛けの巨大象（Le Grand Éléphant, 写真4-2）を誕生させた都市再開発プロジェクト、Machines de l'île（マシン・ド・リル：「島の機械」の意）にもつながっていく。

Gangloff（2017）によると、ラ・マシーンは動く機械を使った大規模な野外演劇の演出を得意とするアソシアシオン（NPO）であり、1999年にロワイヤル・ド・リュクスの芸術監督として巨大人形を創作していたFrançois Delarozièreによって設立された。マナウスは大規模な一時的な舞台装置を使った都市型のインスタレーションを専門とするアソシアシオンであり、元ロワイヤル・ド・リュクスのプロデューサーであったPierre Oreficeによって設立された。この両者がナント島（L'île de Nantes）で進められる再開発プロジェクトに向けて提案した企画がマシン・ド・リルプロジェクトとして結実した<sup>6</sup>（Gangloff 2017:254-255）。

---

<sup>6</sup> マシン・ド・リル公式パンフレット（DOSSIER DE PRESSE 2019）では、両名の想像由来の芸術プロジェクトであることが明記されている。（[https://www.lesmachines-nantes.fr/wp-content/uploads/2019/03/DP\\_Machinesdelile2019.pdf](https://www.lesmachines-nantes.fr/wp-content/uploads/2019/03/DP_Machinesdelile2019.pdf)）



写真 4-2 ナント島の巨大象(Le Grand Éléphant)(写真提供:越智郁乃氏)

ナント島はナント市中を流れるロワール川に浮かぶ中州であり、ナント市の市庁舎等のある古くからの市街地からロワール川を挟んで南に位置する。2000年代の初めから大規模な都市再生プロジェクトが進められており、そのプロジェクト管理は、地元の公営企業<sup>7</sup>であるメトロポールウエストアトランティック協会 (SAMOA<sup>8</sup>) によって進められている。1987年に閉鎖された旧デュビジョン造船所 (Ancien Chantier de Dubigeon) など、産業遺産が集中している島の西部が都市再生の主要部分であり、かつての地域アイデンティティとして市民の記憶に強く残る土地であった。

マシ・ド・リルはかつての造船業の産業遺産のイメージを変える、野外演劇の延長線上にある都市空間文化の発展に向けた事業として決定され、

<sup>7</sup> 地方公共会社 (société publique locale:SPL)。2010年に法制度化された、資本が地域コミュニティによって独占的に所有される公開有限会社。

<sup>8</sup> Societe d'Aménagement de la Metropole Ouest Atlantique.



ナント島の新たな地域アイデンティティを創出し世界的な評判を高めるための公共アトラクションの開発事業として動き始める。2007年には旧造船所の敷地が大型の機械仕掛けのアトラクションを備えた都市公園として改装され、巨大象が設置された<sup>9</sup>。造船所の遺構“Les Nefs Dubigeon（「デュビジョンの身廊」<sup>10</sup>）”は巨大象をはじめとした機械群の展示場と、ラ・マシンの機械を制作するアトリエになった。そこでは、ナント出身の作家Jules Verne（ジュール・ヴェルヌ）<sup>11</sup>の小説に登場する機械<sup>12</sup>、ロワイヤル・ド・リュクス都市演劇から生まれた機械仕掛けの人形、技術者の職場であった造船所など、ナントに所縁のある様々なものがモチーフになったマシンが観光客を楽しませる（越智・川崎 2020:57-58）。

このような文化プロジェクトを用いて都市再開発の方向を探る手法は、3章でも触れた2013年の“parcours green island（「緑の島の通り道」の意）”プロジェクト<sup>13</sup>において自覚的<sup>14</sup>に試みられる。同プロジェクトでナント島の再開発を手がけるSAMOAは、ナント島の再開発の新しい方法を検討するためにデザイナー、建築家、造園家、芸術家、学生等が参加する公共スペースでの12の実験プロジェクトを実施し、開発予定地に様々な文化プロジェクトを配置して人々を誘った。この企画には後述（3-3）するEstuaireやLe Voyage à Nantes(以下、LVANと略記)などの公共空地を活用した芸術祭の影

---

<sup>9</sup> DOSSIER DE PRESSE 2019（前掲注6）

<sup>10</sup> かつてデュビジョン造船所が所有していた建物で、構造（「身廊」）のみを残して改修された。

<sup>11</sup> ジュール・ヴェルヌ（1928-1905）。サイエンス・フィクション（SF）の開祖、SFの父とも呼ばれる。

<sup>12</sup> 機械仕掛けの巨大象はヴェルヌの小説“La Maison à vapeur（邦訳『蒸気で動く家』荒原邦博・三枝大修訳、石橋正孝解説、インスクリプト、2017年）”に登場する象の形をした鋼鉄製蒸気機関車がモチーフになっている。

<sup>13</sup> 欧州緑の首都（後述3-2）のイベントの一環として実施された。

<sup>14</sup> SAMOAは2019年9月にナントで実施されたメディア芸術祭 scopitone において30年のナント島の開発の経緯を都市開発の過渡期に文化プログラムを挿入することで、その後の開発の方針に影響をもたらすような取り組みである「過渡期の都市計画」として、ナント島の再開発に文化プロジェクトが影響を与えたことを自覚的に振り返る展示を行っている（SAMOA公式webサイトより）。



**写真 4-3 Le port végétal installé sur l'île Feydeau (出典: Ville de Nantes 提供: Emmanuelle Gangloff 氏)**

響が見て取れる。

### 3-2 緑地景観行政への波及

ナント市は緑地景観行政に力を入れている都市でもある。かつては植民地からの荷が届く港であり世界から植物が集められた歴史を持つ。前述のマナウスは2000年代からナント市の緑地環境局 (Service des Espaces Verts et de l'Environnement de la Mairie de Nantes : SEVE) のプロジェクトを手がけ、都市緑化に芸術的なインスタレーションの視点をもたらした。Gangloff (2017) によると、マナウスは2004年に実施された国際的な花の祭典”Les Florales (レ・フロラリー: 「花の展覧会」の意)”にて、埋め立てられたかつての河川と島の境界が緑地として残されているL'île Feydeau (フェイドー

地区)<sup>15</sup>において、緑地を河川、歩行者道路を港と見立てるインスタレーション”Le port végétal installé sur l’île Feydeau (「フェイドー島に設置された植物の港」の意、写真4-3)”を実施し、市民にこの場所を庭園として意識させることに成功した (Gangloff 2017:298-299)。

以来、SEVEでは植物を中心とした一時的な作品のアーティスト募集が頻繁に行われ、緑地景観の管理行政において空間を適切に配置し再考する点から、都市の境界を可視化するためのインスタレーションの技法が取り入れられることとなる。レ・フロラリーは5年に一度行われる。マナウスへの二度目のオファーが2009年にも行われ、エルドル川の自然地の名残である quai Ceineray (セイナーレ埠頭)<sup>16</sup>の水上にフローティングガーデンを設置するプロジェクトが提案された。この提案を元にSEVEのディレクターが他のアーティストにも声をかけ企画を実現するなど、行政がインスタレーションの組み立て役を担う動きが起こっている (Gangloff 2017:300-301)。

このインスタレーションは2013年にナント市が「欧州緑の首都 (European green capital)<sup>17</sup>」に採択されたことで、そのイベントの一環として再設置される。プログラムには新たに “Les Jardins à Quai (「埠頭の庭」の意、写真4-4)”と名付けられ、数年間維持されることが計画された。Les Jardins à QuaiはSEVEの課題に沿って生物(動植物)の都市への回帰をテーマに実施され、ボート、フローティングガーデン、ウッドテラスなどの実装はSEVEによっ

---

<sup>15</sup> フェイドー地区はかつてロワール川の中洲の島の一つであった。1930年代に川が埋め立てられ島ではなくなったが、地域の呼称として「L’île Feydeau (「フェイドー島)」の名が残っている。

<sup>16</sup> セイナーレ埠頭は1933年に開設されたエルドル川とロワール川を繋ぐサン=フェリックストンネル (Tunnel Saint-Félix) の北側の入口に所在する水運上の結節点である。

<sup>17</sup> 欧州連合の欧州委員会環境局が主催している環境分野の表彰で、住民20万人以上のヨーロッパ全土の自治体が対象となり、毎年1都市が受賞する。2010年以来、実施されており、ナントはストックホルム(スウェーデン・2010年)、ハンブルク(ドイツ・2011年)、ビトリアガステイス(スペイン・2012年)に次いでフランスで初めて指定された都市である(越智・川崎 2020)。



(左) 写真 4-4 Les Jardins à Quai, (右) 写真 4-5 Stations gourmands  
(出典: Le voyage à nantes 2013パンフレット)

て行われた (Gangloff 2007:305-306)。プログラムは後述 (3-3) する芸術祭 LVANにもSEVEの提案による関連企画として取り上げられている。

SEVEはLVANにおいて、このプログラムの他にも積極的かつ継続的に自身の管理する緑地やプロジェクトに関連する展示の提案を行なっている。果物・野菜・ハーブ等を収穫できる菜園と食事のできる休憩所を組み合わせた“Stations gourmandes (「グルメステーション」、写真4-5)”はその代表例で、2012年から2019年まで継続的に実施されている。このようにアーティストとの連携による試行を通して、行政の緑地景観部局がイベントを活用する新しい行政手法を獲得し、文化芸術行政とも横断する取り組みが行われるようになった。

SEVEはラ・マシーンとも連携を行なっている。2004年のレ・フロラリーでラ・マシーンがSEVEから依頼を受け、空間芸術的なインスタレーションとして構想されたのが「植物探検隊 (L'Expédition Végétale)」のプロジェクトである。これは植物を集めるために世界を旅する飛行温室の設定で行われる、展示・パフォーマンス・音楽演奏・レクチャー・ワークショップ等を組み合わせた野外演劇である。ラ・マシーンが設計した飛行温室“Aeroflorale”を舞台装置とし、演劇人、植物学者、庭師等が会して様々なプログラムが実施された。SEVEからは植物の提供や植物学者の参加が行われた (Gangloff 2017:276-277, 281)。



写真4-5 植物探検隊のブリュッセル公演(出典:wikimedia(CC0 1.0))

「植物探検隊」は2013年の欧州緑の首都プログラムのシンボルの一つとなった。ナント・メトロポール<sup>18</sup>はこのプログラムをヨーロッパの都市への大使に選び、地域間協力公団 (Établissement Public de Coopération Intercommunale) はヨーロッパのパートナー都市が公演を開催できるように積極的なプロモーションを実施した。2013年4月から2013年9月にかけて、ブリュッセル、トリノ、ハンブルグでも公演が行われた(写真4-5)(Gangloff 2017:282)。

### 3-3 観光行政への展開

こうしたアーティストの文化芸術活動によって公共空地に目を向けた都市イメージの変化を観光行政に転ずる視点を持ったプログラムが、ジャン・

---

<sup>18</sup> メトロポール (Métropole) は課税自主権を持つ広域自治体連合。ナント・メトロポールはナント市と近隣にある23のコミュンによって2015年に成立した。

ブレイズを芸術監督とする芸術祭“Le Voyage à Nantes（「ナントへの旅」）”である。「ナントへの旅」という名が示すように、文化芸術を観光に転ずる意図を強く持ったプロジェクトである。

越智・川崎（2020）によると、2012年から行われているLVANは、夏の約2ヶ月の期間開催される。ナントの中心市街地の多様な場所に、地元文化や場所の特性に因んだ現代アートが展示される。場所については、市内の様々な場所や出来事とアーティストをつなぐことを意図して事務局が決定し、作家が招聘される。展示は会期中の一時的なものであるが、市民の評価によっては継続的に残される作品もある。展示は路上に引かれた線（2012年は8.5km）でつながれ、Lieu Unique（リュ・ユニーク）<sup>19</sup>、ブルターニュ城、植物園といった市の象徴的な施設、博物館、広場、歴史的な路地、現代建築、ロワール川岸の景勝地なども含めた散策コースが提示される（越智・川崎 2020:59）。

LVANにつながるナント市の文化芸術政策の動きとして、野外演劇やインスタレーションの取り組みの他、ブレイズをディレクターとするCRDCが芸術祭を通じて公共空地を表現の場として普及させてきた取り組みの存在が指摘できる。前述のグルヌリ城での音楽祭の他、エローのナント市長就任後の1990年から1995年にかけてナント市で夜の芸術祭“Les Allumées（レ・ザルメ：「点灯」の意）<sup>20</sup>”が開催された。

---

<sup>19</sup> リュー・ユニークは、1886年に建設され1986年に閉鎖された旧ビスケット工場である。1990年代初頭にはロワイヤル・ド・リュクスをはじめ、さまざまな文化団体がナント市から半ば公認される形で工場の広い空間を「文化的不法占拠（squat）」していた。この工場跡が1994年に芸術祭レ・ザルメを開催する会場としてCRDCに「発見」された。その後、ディレクターであるジャン・ブレイズによるナント市文化事業の提案をエロー市長が受け入れ、ナント市が1995年に買収し、CRDCが管理を委託されることで、旧ビスケット工場は現代アートの実験場として蘇った（越智・川崎 2020:57）。

<sup>20</sup> 6年間、午後6時から朝6時までの6日間、六つの主要な外国の港からナントにアーティストが集まるという趣旨で実施された芸術祭。ナント港と交易のある六つの主要外国港都市（1990年バルセロナ、1991年サンクトペテルブルク、1992年ブエノスアイレス、1993年ナポリ、1994年カイロ、1995年ハバナ）のアーティストが各年度にそれぞれ集められた。

レ・ザルメではナント市の中心街の他、旧造船業施設の遊休施設であった2,800㎡の旧製氷工場“Le Fabrique de glace（「製氷工場」の意）”が会場として選定され、工場遺構はその後ナントの象徴的な集客施設の一つとなった。さらに、2007年、2009年、2012年<sup>21</sup>には、ロワールアトランティック県の2つの主要都市であるナント市とサン・ナゼール市、及びその間にある12市町村を流れるロワール川の川岸に、その場所の自然・文化環境を反映して作成された現代アートが配置された「屋外美術館（un musée à ciel ouvert）<sup>22</sup>」ともいえる芸術祭“Estuaire（エスチュエール：「河口」の意）”が開催される。エスチュエールでの実践を経て2011年に設立された地方公共会社（SPL）<sup>23</sup>が“Le Voyage à Nantes（芸術祭と同名：以下「LVAN（SPL）」と表記）”である。

LVAN（SPL）はナント・メトロポールとナント市の政治的意志から生まれた組織であり、「ヨーロッパや世界の都市、特に観光の観点から自分たちの地位を確立するための新たな一歩を踏み出すこと」を目的に、ナント・メトロポール観光局、ブルターニュ公爵城やマシシ・ド・リルなど文化芸術に関連する公共施設の管理機関、エスチュエール事務局を統合し、一元化してプロモーションを行うために設立された。20年間ナントを特徴づけ続けてきた模範的な文化政策を多くの人に発信し、国内と欧州レベルでの大都市間競争の中でその地位を主張し、旅の目的地として選んでもらう方針が示されている<sup>24</sup>。LVAN（SPL）はナントを「突出した遺産に欠く」と認識しており、ゆえに文化遺産に焦点を当てるのではなく、他では見られないものを見られる都市としてユーロ圏にアイデンティティを発信することを意図してプロジェクトが進められている<sup>25</sup>。作品を展示する場所については、

---

<sup>21</sup> 当初はビエンナーレとして2011年に開催が予定されていたが、新しい組織LVAN事務局が成立したため延期され、2012年に芸術祭ル・ヴォワイアージュ・ア・ナントと連携して実施された（Gangloff 2017:331）。

<sup>22</sup> LVAN（SPL）公式サイトに記載。

<sup>23</sup> 前掲注7

<sup>24</sup> LVAN（SPL）の設立時のプレス“Dossier de Presse Conférence de presse 20 janvier 2011 Création de la SPL（LVAN（SPL）webサイトより入手）”を参照

<sup>25</sup> LVAN（SPL）プロジェクトリーダーへの聞き取り調査（2019年3月）より

様々な場所や出来事とアーティストをつなぐことを意図して LVAN (SPL) が決定し、作家を招聘する<sup>26</sup> (越智・川崎 2020:59)。

### 3-4 小結

本節を通じて、文化プロジェクトがナント市の都市再開発や緑地景観行政、そして観光行政に与えた影響を確認した。都市再開発においては、ナント島の再開発において、文化プロジェクトを通じて「発見」された都市の物語がモチーフとなり、島の開発の方針に影響を与えていく。緑地観光行政においては、担当部局がアーティストとの連携を通じて文化プロジェクトを活用して都市の中の緑地空間の課題に取り組む手法を習得し、展開を行っている。観光行政においては、公共空地にアートを挿入して再解釈を図る手法が市街地に展開され、観光誘致を企図した芸術祭としての活用が行われている。このような分野横断的な文化プロジェクトの展開は、1990年からの公共空地に目を向けた文化政策の取り組みが、広く市民や行政部局に浸透してきた成果と見ることができるだろう。

## 4 公教育としての「都市のセノグラフィ」の成立

### 4-1 ナントにおける「都市のセノグラフィ」の理論化と公教育への展開

1990年からの公共空地に目を向けた文化政策の取り組みが、広く市民や行政部局に浸透してきた状況を確認した。公共空地での文化芸術活動を元に都市空間を再解釈するナントの政治的手法は、国立大学における研究・教育にも影響を与えている。ナント国立建築大学 (ENSAN) で 1999年から2013年にかけて教鞭をとった Marcel Freydefont は、「セノグラフィのまなざしと手法を、例えば展覧会や都市のような他の空間、舞台、領域に意図的に適用することが重要である (Freydefont, Lacroix 2012:227)」と述べている。2013年から教員を務める Emmanuelle Gangloff は、「セノグラフィの手法は一時的なアプローチによって、人々に演劇化されたビジョンの中で自分

---

<sup>26</sup> LVAN (SPL) プロジェクトリーダーへの聞き取り調査 (2019年3月) より



たちのまちとの対話を促し、通りや広場、建物に対する見方を変えることを可能にすると述べる。さらに、ナントが芸術家の助けを借りてこのような物語の展開を模索してきたことを指摘し、セノグラフィは都市デザインのプロセスの一部となっていると述べる (Gangloff 2014:52,53)。

ENSAN ではこのように舞台空間の演出技術が都市デザインに転用される技法が都市のセノグラフィとして理論化され、教育にも取り入れられていく。まず、舞台空間の演出技法であったセノグラフィを都市空間に向け、ナントでの取り組みを理論化する「都市のセノグラフィ」の考え方とその職能の視点が提起された。次にその教育の中の実践として実際の「都市のセノグラフィ」のプロジェクトに学生が参画するような教育プログラムが実施される。これは創造都市の担い手を育成するための教育機関及び学生の包摂と捉えることができる。

ENSAN は建築学位である DPEA (Les Diplômes Propres aux Écoles d'Architecture) 認定が認められた 20 のフランスの国立建築学校の一つである。ENSAN は創造的都市として再開発が行われるナント島の重要な要素の一つとして、2009 年 2 月にナントの中心市街地から北に離れたブレイユ＝バルブリ地区 (Quartier Breil-Barberie) からナント島へと移転が行われた。ここでは「建築士以外の建築に関する職業の多様化を考慮して、造船、都市計画、建築・都市演出 (des ambiances architecturales et urbaines)、セノグラフィ等の分野での専門的な教育が行われている (Freydefont, Lacroix 2012:226)」ことが特徴である。セノグラフィの専門教育を行う公立学校はフランス国内に複数ある<sup>27</sup>が、DPEA が取得できるのは ENSAN 1 校のみである。

セノグラフィは元々舞台空間を演出する技術であり、一般的に、作品、オブジェクト、イベントなどの公共の表現やプレゼンテーションに役立つ織

---

<sup>27</sup> ENSAN の他、リヨン国立劇場芸術技術学校 (École nationale supérieure des arts et techniques du théâtre à Lyon)、パリ国立装飾芸術学校 (École nationale supérieure des arts décoratifs à Paris)、ストラスブール国立劇場演劇芸術高等学校 (École supérieure d'art dramatique du Théâtre national de Strasbourg)、ストラスブール装飾芸術学校 (École des arts décoratifs de Strasbourg)、パリ高等芸術技術学校 (École supérieure des arts et techniques à Paris) でセノグラフィの専門コースが設置されている (Boucris, Freydefont, Sarti 2012:200)。

細な空間をデザインする芸術と定義される。建築学校でのセノグラフィ教育は Freydefont によってクレルモン＝フェラン国立建築学校 (École Nationale Supérieure d'Architecture de Clermont-Ferrand) で 1984 年に設立される。セノグラフィ教育部門は 1999 年に ENSAN に移転されるが、Freydefont は ENSAN でも 2013 年までセノグラフィ教育に携わり、舞台演出の手法であったセノグラフィを都市空間に展開させる取り組みを推し進めた。

2006 年にはセノグラフィ建築の研究調査グループである“GERSA (Groupe d'Étude et de Recherche Scénologique en Architecture)”が結成され、ENSAN のセノグラフィ教育に裏づけされた研究室の位置づけとなる。その研究対象は「舞台建築に関連した空間演出 (la scénographie en lien avec l'architecture des lieux scéniques)」「都市と景観の空間演出 (la scénographie urbaine et paysagère)」「バーチャル・セノグラフィ (la scénographie virtuelle)」の 3 点であるが、うち「都市と景観の空間演出」の分野は、「都市のセノグラフィを含んだ景観、都市装飾、催しへの問いを通した、都市への介入と計画に関わる技術的、倫理的、美学的、政治的な問題の研究<sup>28</sup>」を扱う構成となり、機関としても都市のセノグラフィ部門が確立された。

#### 4-2 ナント国立建築大学における「都市のセノグラフィ」の実践教育

Freydefont はセノグラフィ教育について、「俳優と観客の関係が重要であるため、演劇作品と空間との相互作用、舞台と舞台装置との相互作用、演出空間と舞台表現との相互作用、舞台演出と設備演出の組み合わせを演劇の実践の発展を最初に学んでいく。したがってこの教育は建築の問題にしっかりと根差している (Freydefont, Lacroix 2012:227)」とし、前述のように他の空間、舞台、領域に応用することを重視する。さらに Freydefont はセノグラフィの建築学位 (DEPA) が切り開く演出の実践として「都市のセノグラフィ＝ストリートシアター (scénographie urbaine [théâtre de rue])」をその職

---

<sup>28</sup> GERSA のブログ (<http://gersa-ensan.blogspot.com/2009/03/presentation-du-gersa.html>) 参照

能に数えている<sup>29</sup> (Freydefont, Lacroix 2012:228)。

また、Freydefont はナントにおける実際のストリートシアターの演出に積極的な協力を行っている。特にロワイヤル・ド・リュクスやラ・マシーンの演出家である Delarozière との関係は深い。1990 年代にロワイヤル・ド・リュクスの演出を行っていた Delarozière は、野外演劇などの当時の取り組みをセノグラフィとは認識しておらず、彼をセノグラファーと呼び始めたのは Freydefont らであると述懐している (Gangloff 2016b:53)。このように、ナントでのアーティストの取り組みが研究者・教育者の視点からセノグラフィの新たな分野として見做されるようになった点は興味深い。

ENSAN の教育プログラムでは、こうした実践者のプロジェクトへの参画も行われている。前述のラ・マシーンの野外演劇プログラム「植物探検隊」には学生の課題として舞台装置の提案 (写真 4-6 参照) が行われ、共同製作者に ENSAN がクレジットされている<sup>30</sup>。また、ラ・マシーンが 2015 年に作成した企業案内<sup>31</sup>によると、ラ・マシーンは ENSAN と提携し、Delarozière は 2 年ごとにセノグラフィ部門で教鞭をとり、学生たちを野外劇場オブジェのデザイン設計ワークショップに迎え入れていることが確認できる。

また、2012 年から開始されたル・ヴォワイアージュ・ア・ナントの初年度には、都市環境と相互作用する一時的な建築物により非日常的な視点を提起する 3 つの作品“Plateformes-points de vue (「視点のプラットフォーム」の意)”<sup>32</sup>が ENSAN の研究室プロジェクトとして設置された (写真 4-7)。

---

<sup>29</sup> 「舞台美術 (演劇、ダンス、オペラ、音楽、ストリートアート、サーカス、映画、テレビ、ビデオ、マルチメディア、あらゆる新しい形態の舞台装置と衣装)、舞台装置の設計 (常設および仮設の公演会場の舞台装置の設計)、都市空間演出 (ストリートシアター)、イベント空間演出 (お祭り、記念、祝賀)、展覧会空間演出 (常設展・仮設展) など」 (Freydefont, Lacroix 2012:228)

<sup>30</sup> ラ・マシーン web サイト (<https://www.lamachine.fr/spectacles/l-expedition-vegetale/>)

<sup>31</sup> ラ・マシーン web サイトより入手

<sup>32</sup> quartier bouffay (ブーフエイ地区) の allée de la tremperie (トレンペリ路地) に設置された“LE VORONOI”, 同地区の rue de l'émercy (エメリー通り) に設置された“BOLDUQ”, quai de la fosse (フォセ埠頭) の rue d'ancien (アンシン通り) に設置された SUPERAMA の三つの作品が設置された (ル・ヴォワイアージュ・ア・ナント 2020 年度パンフレット)。

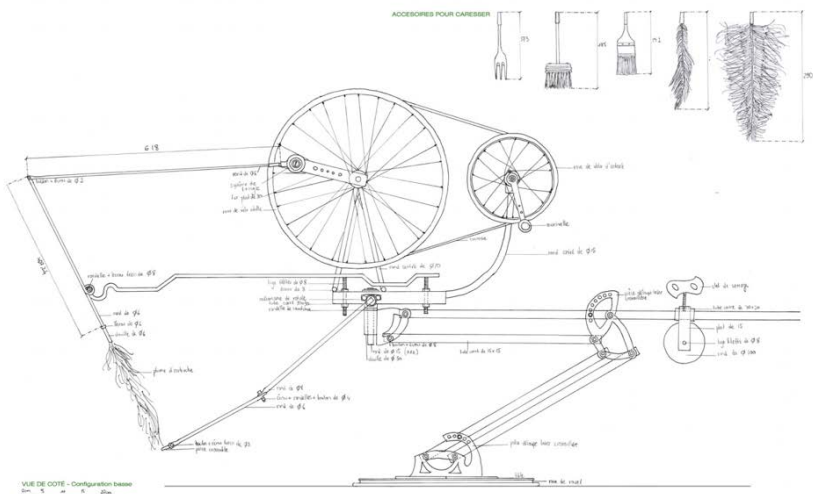




写真 4-7 plateformes-points de Vue の作品群の一つ“SUPERAMA”。路地から突き出す彫刻物が視線を誘導する。(出典:Le voyage à nantes2013 パンフレット)

イベント企画、資金管理、運営まで学生によって進められた<sup>34</sup>。

セノグラフィの視点を持って都市プロジェクトと連携する教育プログラムは、Freydefont が離れた後も ENSAN で継承される。その一つが、ナント市に隣接するルゼ市（ナント島のロワール川を挟んで南に位置する）で実施される大規模な ZAC（自治体による協議区画整備）を伴う再開発プロジェクト<sup>35</sup>に先立ち、将来の住民がどのように区域を使用するかを予測することを意図して実施された文化プログラム<sup>36</sup>Transfert（トランスフェー：「転

<sup>34</sup> PARCOURS GREEN ISLAND 公式パンフレット

<sup>35</sup> この地区では 2023 年から 2032 年にかけて 6,000 世帯の住宅建築が可能な 600,000 m<sup>2</sup>の再開発“Pirmil-Les Isles”計画が予定されている。

<sup>36</sup> 主宰団体であるアソシアシオン“Pick Up Production”の web サイトを参照 (<https://www.pickup-prod.com/projet-transfert-zone-libre-dart-de-culture-a-reze/>)



写真 4-8 Transfert 会場入り口(写真提供:越智郁乃)

移、遷移」の意、写真 4-8) である。は 2018 年から 2022 年にかけての 5 年間の時限プロジェクトとして開発着手前の空地が仮設の公共広場となり、夏の期間にバー、レストラン、プレイエリア、集合スペースなどが建設される。そこではコンサート、ショー、ワークショップなど様々な文化プログラムの実施と並行して将来の都市予測のための議論が進められる。

2020 年のトランスフェーに向けて ENSAN では具体的な実践を伴う設計提案の教育プログラムが行われた(写真 4-9)。提案内容は複数台が連なる移動式のフォリー(装飾用の建物)であり、普段はトランスフェーの会場に固まって設置されるが、イベントやプロモーションのタイミングでナント市内に移動し、トランスフェーのプログラムを輸出することが企図に組み込まれた。このように、実際の都市プロジェクトと連携して、都市の時間軸を視野に入れた建築的提案を実践する動きが公教育の中に浸透しつつある。



写真 4-9 Transfert での実践に向けた ENSAN 学生の設計提案(左)と実寸大作品の作成過程(右)(筆者撮影)

## 5 おわりに

本稿では、1980年代の政変に端を発し、1990年代のエロー市政で舵が取られたナント市のその後30年に渡る都市文化政策に着目し、行政組織との相互の関係を持って創造都市における担い手が育まれてきた状況について論じた。ナントの事例を考察すると、以下の三点が担い手育成の側面から創造都市のあり方を考える論点として提示できよう。

一に、ナントにおける都市文化政策の視点が、文化遺産や建築物といったいわゆる都市の「図」的な側面だけではなく、「地」的な要素である景観や公共空地に着目したものであることは重要である。ロワイヤル・ド・リュクスは実際の都市空間の路上であり、SEVEのプログラムは緑地景観に、LVANは公共空地に芸術文化鑑賞の目を向けさせる。

LVANの芸術監督ブレイズは『国の公共空間における芸術と文化の使命』審議会の会長として文化交流大臣に提出した報告書において、「芸術と文化に最大の数がアクセスできる」視点を示している<sup>37</sup>。本稿では触れなかった

---

<sup>37</sup> MISSION NATIONALE POUR L'ART ET LA CULTURE DANS L'ESPACE PUBLIC "RAPPORT REMIS PAR JEAN BLAISE, PRÉSIDENT DE LA MNACEP À MADAME AUDREY AZOULAY, MINISTRE DE LA CULTURE ET DE LA COMMUNICATION", 2016.1

が、ナント市の文化政策のあり方を示す重要な文化プログラムであるクラシック音楽の祭典“la folle journée (ラ・フォル・ジュルネ：「熱狂の日」の意)”<sup>38</sup>は、コンサートや関連イベントへのアクセスを容易にし、クラシック音楽をより多くの聴衆に公開することで音楽を支える新しい聴衆を開拓することが企図されている。LVANの前段階のプログラムであるエスチュエルでは、アーティストはただ風景に溶け込むだけでなく、一般の人々とのゲームを確立するような方法で作品を考えることが求められた (Delavaud 2007:144)。多くの市民が文化プログラムに触れ、容易に鑑賞・参画できることで、文化プログラムの担い手が育つことにもつながっていく。

二に、先駆的な取り組みを行う作家を受け入れるだけでなく、行政と連携してプログラムの恒久化が模索されてきた。ロワイヤル・ド・リュクスを受け入れにあたっては、行政の立場からプログラムの実現に際して調整を行う役職が設置された。SEVEは行政目的を達成するためにマナウスやラ・マシーンの企画を活用し、作家に全てを担わせるのではなく行政の中の人材も専門性を生かしてプログラムを進め、自らもアートプログラムを提案できる機関となった。マシ・ド・リル・プロジェクトにおいては、一時的なプログラムとして継続してきた屋外演劇を都市空間文化のアイデンティティとして捉え、これまでの都市の歴史のモチーフ等も取り入れた恒久的な公共アトラクションとして都市再開発が行われた。その後このアトラクションの管理機関は古くからの文化財の管理機関と統合され、合わせて観光行政や芸術祭の運営も担うLVAN (SPL) となる。これらは、アーティストによる活動を一時的なものに留めず、行政の中にも担い手を育て恒久化を図る手法と見ることができよう。

三に、研究・教育機関である大学でこうした手法の理論化が行われ、新た

---

<sup>38</sup> ナント市において毎年1月下旬から2月上旬頃にかけて行われるクラシックの音楽祭。1995年に開始された。公的資金を投資することで、座席の値下げ、クラシック音楽に慣れていない聴衆へのアクセスの促進、国際的に有名なアーティストの招聘等を実現している。公演のほとんどはナント国際会議場 (Cit  des congr s de Nantes) で実施され、オープンステージとなるメインホールではその年の主要なアーティストも参加する終日無料のコンサートが行われる。



な職能の視点を持って実際のプロジェクトと連携した教育が行われている。また、前節で紹介したトランスフェーの試みは、ナントを拠点に文化イベントを企画するアソシアシオン“Pick Up Production (PUP)”によってメトロポール政府に提案され実現したものである。PUPは2012年よりグラフィックアーティストをコーディネートする形でLVANに関わることで展示の場と実績を広げ、このように個の機関として公的事業を提案し受注するに至る<sup>39</sup>。このPUPの試みにはENSANの教員もプロジェクトメンバーとして参画していた。大学教育の他、LVAN等の公共の文化プログラムが、地域のアソシアシオンを担い手として育成する機能を持っていることも重要な点である。

最後に、上記三つの論点で示した担い手育成と理論化の往還までを含め、都市を時間軸で見る「都市のセノグラフィ」の視点を成立させてきたことをナントの独自の点として指摘したい。Gangloff (2016a) はセノグラフィの技術が都市空間に取り込まれることによって、介入者の役割を果たすための以下の3つの主要なスキルがもたらされると述べている。①都市の物語を実践する（空間への演劇的介入手法）、②長期的もしくは一時的な関係を管理する、③空間と市民との関係を考える（Gangloff 2016a:51）。一時的な文化プログラムを活用しながら都市空間と市民が交錯する都市のアイデンティティを構築してきたナントの30年は、都市空間の物語に市民を包摂していくガバナンスの取り組みと見ることもできよう。以上のことから、ナントに限らず都市と文化プロジェクトの関係を読み解くにあたって、ガバナンスのあり方をどのように捉えるかという視点が重要であることを本稿では提起したい。

#### 〔参考文献〕

- 越智郁乃・川崎修良 (2020) 「都市計画と観光まちづくりの横断に向けて-フランス・ナント市のアートプロジェクトを事例に」立教大学観光学部紀要, 第 22 号
- 長嶋由紀子 (2018) 「フランス都市文化政策の展開：市民と地域の文化による発展」美学出版

---

<sup>39</sup> 詳細については越智・川崎 (2020) を参照。

- Boucris, L., Freydefont, M. et Sarti R. (2012) "Incertitude cartographique", Études théâtrales, 2012/2-3 (N° 54-55) , pages 191 à 206
- Delavaud, L. (2007) "Espace politique/espace culturel : les intérêts d'une alliance", Terrains & travaux, 2007/2 (n° 13) , pages 136 à 148
- Delavaud, L. (2007) "Espace politique/espace culturel : les intérêts d'une alliance", Terrains & travaux, n° 13, pages 136 à 148
- Freydefont, M., Lacroix, P. (2012) "Le département Scénographie à l'École nationale supérieure d'architecture de Nantes" Études théâtrales, No.54-55
- Freydefont, M. (2014) "La ville et le théâtre, art de la présence, art du présent" Place Publique, No.48, pages 37 à 40
- Gangloff, E. (2014) "Quand Les Machines mettent la ville en scène" Place Publique, No.48, pages 136 à 148
- Gangloff, E. (2016a) "La scénographie urbaine, émergence d'une fonction" , L'Observatoire, 2016/1 (N° 47) , pages 51 à 53
- Gangloff, E. (2016b) "Du spectacle à l'aménagement urbain, des machines pour transformer la ville : Entretien avec François Delarozière, Propos recueillis par Emmanuelle Gangloff", L'Observatoire 2016/1 (N° 47) , pages 53 à 56
- Gangloff, E. (2017) "Quand la scénographie devient urbain: Nantes comme observatoire des fonctions du scénographe dans la fabrique de la ville", Architecture, aménagement de l'espace. Université d'Angers, France

## 第5章

日本のまちづくり活動における担い手と学生の関係：

### 京都における市民プロジェクトを題材に

川崎修良・越智郁乃

#### 1 はじめに

##### 1-1 ナントにおける文化プロジェクトの担い手育成

これまでの章で確認してきたように、現在の創造都市の一つとして知られるナントでは、衰退した造船工業都市から文化芸術都市へのイメージ転換に成功した1980年代後半から始まる文化芸術政策において、都市の中に文化プログラムの担い手が育つことが意識されてきた。文化政策の導入の時期である1989年に誘致された野外演劇劇団 Royal de Luxe（ロワイヤル・ド・リュクス）が、都市空間に人々の目を向けさせる担い手となった。これにより都市空間をアートのために活用するための課題が顕在し、行政にこの課題に対応する部門が設置される。さらに、ロワイヤル・ド・リュクスの活動から派生したアソシエーション（NPO）が都市再生や緑地環境等の政策部門と連携し、それぞれの行政セクターが公共空地を活用した文化プログラムによって、自部門の課題の解決を図る手法を学んでいく。2012年から開始された芸術祭 Le Voyage à Nantes（ル・ヴォワイアージュ・ア・ナント：「ナントへの旅」の意）は、市民の中からの都市空間を活用するアーティストの発見<sup>1</sup>や、過渡期の都市計画のプロジェクト Transfert（トランスフェー：

---

<sup>1</sup> 一例として、2018年から芸術祭の作品となる“Jungle Intérieure（屋内ジャングル）”は、ナント在住のアーティストである evor が、10年以上にわたって彼のアパートメントの共有空間で独自に植栽し続けた「庭」である。evor の家を訪れたジャン・ブレイズがそれを発見したことを機に、「庭」を一望できる展望台と階段が設置され、芸術祭の展示に組み込まれた（越智・川崎 2020）。

「転移、遷移」の意)のような個の機関として公的事業を提案し受注するアソシエーションの育成につながっている。また、大学においてもこうした取り組みの理論化が進み、「都市のセノグラフィ (scénographie urbaine)」として建築学の教育に還元され、都市再生を担う新たな職能家の育成につながっている。

## 1-2 京都の大学政策における文化・芸術の担い手としての学生

それで日本の場合、創造都市の創出に向けて、都市空間を舞台として文化プログラムを行うアクターをどのように育成していくことができるだろうか。「はじめに」で述べたように、日本では都市に関わる市民活動については「まちづくり」の分野が当てられることが一般的であるが、国の文化政策における「まちづくり」とは長らく文化財活用を意味し<sup>2</sup>、広い意味での文化をまちづくりに向ける視点が政策として示されたのは近年のことである<sup>3</sup>。もちろん、個別都市の取り組みや市民主導のまちづくりにおいてはこの限りではない。ナントで見られる都市再開発の過渡期という視点を持って日本での活動を詳細に検討すると、市民主導の文化プログラムが立ち上がり、様々なセクターがそれぞれの所管の範囲内で市民の支援を模索している様子が見て取れる。

とりわけ京都市では、早い段階から「まちづくり」のアクターとして学生を重視してきた。1993年の段階で京都市が策定した「大学のまち・京都21プラン」において、「文化・芸術などの分野において高い創造性を発揮」する学生の感性が京都の活性化を担っており、その「創造的な活動の場をつく

---

<sup>2</sup> 例えば、文化庁が1998年に策定した「文化振興マスタープラン」にもまちづくりの言葉が現れるが、「文化財を活かしたまちづくり」「地域の歴史的な文化の所産等を活かしながら、文化の香り高いまちづくり」「歴史的な町並みや民俗芸能などを活かした文化によるまちづくり」等、文化財の活用が紐付けされた用法に限られる。

<sup>3</sup> 2007年に閣議決定された「文化芸術の振興に関する基本的な方針」において地域の文化力を広くまちづくりに生かす視点が言及され、2017年公布の「文化芸術基本法」の基本理念(第二条)で芸術文化とまちづくりの有機的な連携への配慮が記載された。

っていくことは、魅力的なまちづくりにつながっていく」と言及する<sup>4</sup>。京都市は、日本の大都市の中でも人口に占める学生の割合が高く、1990年代から学生と地域を連携させたまちづくりの施策にも取り組んできたことから、学生をただ数年間そこで過ごす人として政策から排除せず、むしろ積極的に組み込んで都市に包摂しようとしていることが分かる。例えば2001年策定の総合計画「京都市基本計画」には、学生とまちづくりの関係が記述されている<sup>5</sup>。また、2004年策定の「大学のまち・わくわく京都推進計画」では、学生の「多様なまちづくりへの参画や企画」がビジョンに示され、同年に大学と地域との連携による取組に助成金を交付する「大学地域連携創造・支援事業」が開始された。

### 1-3 本章の視座：京都の文化プロジェクトにおける学生

そこで本章では、京都における市民主導のまちづくりにおいて、特に芸術文化の創造性をその活動趣旨に含み、加えて企画・運営面で学生が参画したプロジェクトに着目し、運営者によるマネジメントと行政施策との関わりについて検証することを通じて、学生がいかに関文化プロジェクトや都市政策に組み込まれようとしているかを考察する。具体的には、街区のライティングのプログラムにより三条通りの景観イメージを変化させた「三条あかり景色」、白川に仮設の茶席を設け文化的景観の現代的解釈を試みる「白川あかり茶の湯」、美大移転が決定した元同和地区である崇仁地区に一時的な屋台村を設置した「崇仁新町プロジェクト」の三つを対象に調査を実施した。

---

<sup>4</sup> 「大学のまち・京都21プラン」第二部第1節(2)「京都の大学の教職員や、人口の1割にも相当する数多くの学生は、地域におけるアカデミック・インフラの一つでもある。特に、学生の持つ若い感性は、文化・芸術などの分野において高い創造性を発揮し、「若者のまち」としての京都の活性化を担っている。彼らの生活環境を充実するとともに、創造的な活動の場を作っていくことは、魅力的なまちづくりにもつながっていく」。

<sup>5</sup> 総合計画「京都市基本計画」第2章第2節「国公立を合わせて37の大学・短期大学を中核とする高度で豊富な学術研究機能は京都の優れた都市特性であり、人口の約1割に相当する学生や教員、研究者等の多彩な人材、あらゆる分野の「知」の集積は、活力あるまちづくりに欠かせないものである」。

いずれも行政主導ではなく市民主導のまちづくりの試みであり、スタッフとして多くの学生が関与していることが特徴である。これらの事例を仔細に検討することを通して、実践的なまちづくりを通して創造都市の担い手を育み、政策と市民双方が刺激を受けながら都市像を描くための都市再生の手法に向けて議論することが本章の目的である。

## 2 三条あかり景色における学生のマネジメント

### 2-1 プロジェクトの成立背景

三条通は16世紀より東海道の京都側の起点となった京都の主要道路である。近代初期には近代建築が集積的に建てられ、これが現在まで継承されていることから、京都でも景観評価の高いエリアであり、1985年から行政の景観保全の対象区域（「歴史的界わい景観地区」）にも指定された。2000年代になってこのエリアの夜の賑わいに乏しいという市民の課題意識から実施されたのが「三条あかり景色」である。

2004年から2006年にかけて実施された三条あかり景色は、9月の3日間プロジェクターを用いて三条通の景観を映像でライトアップする催しで、2006年には今でいう「プロジェクションマッピング」の試みも行われている。主催は2003年6月に発足した任意団体「楽洛まちぶら会」である。この団体の発足は、京都のローカル放送局であるKBSの番組中に行われた「京都ブランド」をテーマとした議論の中で「夜の賑わい創出」という課題が挙げられたことがもとになっている。この課題に対して、三条通の建物のライトアップに取り組むというアイデアを実現するために結成された同団体は、京都の都心部でまちづくり活動を行ってきたメンバー6名で結成され、口コミによって参加者が広がった。多様な職種の20～40代の若手が主要メンバーであった。



写真 5-1 三条あかり景色の様子(写真提供:大島祥子氏)

## 2-2 プロジェクトにおける学生のマネジメント

学生の参画については、同エリアの商業施設である「新風館」<sup>6</sup>が「大学生を中心として、日常的に社会的な活動を担っているメンバーのネットワークを構築していたことから、多くのメンバーの参加を得ることができた」<sup>7</sup>。2004年に実施された第一回の三条あかり景色では3日間で180名のボランティアスタッフが参加している。同年のプロジェクトにおいて、ボランテ

---

<sup>6</sup> 1926年に竣工された旧京都中央電話局の建物が改築され、2001年にとしてオープンした商業施設であり、それ自体が三条通の景観要素である近代建築である。2003年7月に行われた「楽洛まちぶら会」の第一回会合の会場が新風館で行われるなど、同会の活動の一つの核であったことが窺える。

<sup>7</sup> 「三条あかり景色」で事務局を担当した大島祥子氏へのヒアリング（2020年8月3日）より。

ィア担当の役割は当時の新風館館長が担っている。

また、「京都国際学生映画祭」「京都学生祭典」のような既存の学生団体との連携が行われていることが、重要な特徴として指摘できる。この両団体の活動には、「大学コンソーシアム京都」における学生交流事業が大きく関わっている。大学コンソーシアム京都は複数の大学や自治体、地域企業等が連携する事業を行う大学連携組織であり、1994年に京都市の支援のもと設立された<sup>8</sup>。その設立方針は前述の「大学のまち・京都21プラン」(1993)にも示されている。

前述した「京都国際学生映画祭」は、学生が主体となった映画祭で、2000年に「大学コンソーシアム京都」設立イベントの一環として実施された「京都学生映画祭」が基にある。2002年からはその主催事業として現在まで継続的に実施されている。また、「京都学生祭典」は有志の学生によって組織され、音楽、おどり、食、スポーツ、アート等の出し物が一堂に開催されるフェスティバルである。2000年から2002年にかけて、大学コンソーシアム京都が主催となって開催した「京都・学生フェスティバル」が基となり、2003年から現在まで継続的に実施されている。

このように、公の空間で文化プログラムを恒常的に実施することを趣旨として組織されていた団体に声をかけることで、双方の活動趣旨に沿ったボランティアとしての学生参画が実現した。京都学生祭典のメンバーについては交通誘導の仕事が自分たちの祭りのリハーサル、実地研修の場として受け入れられた。京都国際学生映画祭のメンバーについてはまちなかの様々な場所に照射する映像コンテンツを求める「三条あかり景色」と、映画祭をPRしたい学生とのニーズが合致した。「三条あかり景色」が映像系のコンテンツをPRする舞台となることは口コミで広がり、2006年には大阪芸術大学、京都芸術デザイン専門学校、嵯峨美短大、立命館大映画部など様々な所属の学生からもコンテンツが提供され、場所に照射する映像を探すのではなく、映像から場所をコーディネートする状況にまで至る。

---

<sup>8</sup> 1994年に「京都・大学センター」が設立される。1997年より財団法人大学コンソーシアム京都、2010年より公益財団法人大学コンソーシアム京都となる。



### 2-3 行政施策とプロジェクトの変遷

初年度 2004 年「三条あかり景色」はあかりのコンテンツが 28、ボランティアスタッフ 180 名である。2006 年度にはコンテンツ 66、コアメンバーである「楽洛まちぶら会」66 名、ボランティアスタッフのべ 400 名となり、多様な連携企画が生まれ、年々盛り上がりを見せた。また、道路や水面など公共空間を使って実施する企画であるため、行政の許可を得てイベント実施が行われた。2004 年には京都市の外郭団体である「景観・まちづくりセンター」と協働した社会実験として「ネットワーク型まちづくり組織によるまちづくり」の課題検証が進められるなど、行政的な視点での連携も進められていた。

しかし、2007 年に行政による交通社会実験との連携が検討される中、行政の一方的な事業規模縮小により「三条あかり景色」は中断を余儀なくされる。以降、イベントとしての「三条あかり景色」は実施されていないが、あかりのコンテンツによって賑わいを創出する試みについては、2009 年から 2018 年にかけて実施された昭和初期の小学校建築へのプロジェクションマッピングのプログラム「マチデコ・インターナショナル」、2011 年度から再整備が進められた岡崎公園にて実施された「岡崎ときあかり」において取り入れられた。これらはいずれも京都市の事業である。

「岡崎ときあかり」は 2011 年から 2019 年まで年一度のイベントとして開催され、そのメインコンテンツとして岡崎公園地区内の近代建築である京都市美術館（現京都市京セラ美術館）やその別館建物の壁面を活用した「プロジェクションマッピング」が行われ、2013 年からは参加型のプログラムで担い手を創出する趣旨を持ってプロジェクションマッピングのコンペティションが導入されている。同プログラムの事務局及び演出技術提供には、「三条あかり景色」の事務局のコアメンバーが参画した。

### 2-4 小結

「三条あかり景色」では、その初期段階で都心再生のまちづくりへの思いが高まる市民の活動と、公の空間での芸術・文化活動を目的とした学生組織との連携が行われた。行政施策との関わりから見ると、文化政策としては

なく、大学政策の視点で進められた学生組織づくりの成果が文化プロジェクトによるまちづくりに関心を向けた市民活動と呼応し、学生の参画につながったと言えるだろう。

また、市民有志によって開始されたプロジェクトが、その後京都市の事業となり、あかりのプログラムが継承される。特に「岡崎ときあかり」においては広く市民にプロジェクトマッピングのプログラムの参加者を募る参加型の企画が導入され、文化芸術の担い手として市民を組み込む形が復活した。そこには、最初に市民活動として立ち上げた担い手が、後に同活動を行政の事業として取り組んでいく中でも参画していることが影響している。市民によるまちづくり活動を通して、行政の事業の中に学生の参画を促すことで、事業の担い手（職能）が育っているのである。

### 3 白川あかり茶の湯における学生のマネジメント

#### 3-1 プロジェクトの成立背景

白川は、古来より東山から鴨川に流路を持つ河川であった。近代に琵琶湖疏水が開通すると一旦疏水と合流し流路を共有した後、平安神宮へと続く神宮道の西で琵琶湖疏水と分かれて鴨川に流入する経路となった。水門を経て疏水から分かれる白川は水量が安定し、戦後流路周辺では水利を用いた精麦業や染色業が営まれた。川に降りる階段があちこちに設けられ、炊事洗濯に用いたり、児童プールとして利用されたりするなど、親水性の高い空間であった。こうしたかつての生業や生活と河川との関わりが、2015年の「京都岡崎の重要文化的景観」指定に先駆けた調査で発見され、白川とその周辺地域も重要文化的景観エリアに追加された。

「白川あかり茶の湯」は、同エリアの親水性の高い河川空間の景観を再評価することを意図して2014年から実施された。川の中に設けられた茶席で市民が来訪者をもてなす企画が主となる文化プログラムで、これには水上空間で住民が営んでいた生活景を回想する意図が折り込まれている。このような京都の歴史的な重層性のある景観を再評価する趣旨の基で、建築の専門学校生による茶室づくり、大学茶道部の学生による茶の湯のもてなし、



写真 5-2 白川あかり茶の湯の様子(筆者撮影)

まちづくりを学ぶ大学生による屋外空間での中国茶喫茶や、日常的景観を鑑賞するための MAP づくりなど、学生の興味のある学びと関連づけた活動が実施されている。

### 3-2 プロジェクトにおける学生のマネジメント

「白川あかり茶の湯」については、そもそも同企画の立ち上がりが学生有志によるものであったことが一つの特徴である。岡崎エリアの下流の栗田学区で、地域住民と協働で河川空間を活用した交流づくりのプログラムを行っていた学生の活動が、その端緒である。栗田学区では、1973 年から 2000 年にかけて「白川子ども祭り」という、子供が川で遊び親しむことを目的として金魚等を川に放流するお祭りが、地域住民によって行われていた。担い手不足から中断していた祭りは、2010 年に地域自治会によって再開された。

翌年 2011 年に河川空間を活用したお祭りに関心を持った都市計画を学ぶ

京都大学の大学院生が祭りの手伝いに参加し、その後地域住民と学生が連携した様々なプログラムが立ち上がることになる。地域住民や子供達が河川を地域資源として認識し、愛着を持ってもらうことが地域住民の認識する本来の課題であったことから、2012年度には川の使い方を考えるワークショップとシンポジウムが実施された。ワークショップでは地域住民と学生がチームとなり、まちあるきやアイデア交換等のプログラムを通して白川の使い方を考えた。これらのプログラムを通して河川で茶の湯を行う発想が生まれ、実際に河川空間及び沿道などの7カ所で茶の湯を実施するプログラムが2013年度に実施された。

翌年2014年にはプログラムに参加していた大学茶道部の学生が中心となり、建築の専門学校生と協働で、地域で茶の湯を行う意義を考えるワークショップが実施された。さらに、2015年に重要文化的景観エリア指定の中で景観づくり意識が高まった岡崎エリアの白川沿道の住民との景観調査の活動を通して、茶の湯と景観鑑賞の関わりなどが議論され、プログラムを実施する意義である「茶の湯の芸術鑑賞の視点を活用して、場所の歴史的重層性や景観を再発見する」というコンセプトが明確になっていく。

その後、現在まで毎年建築学校による茶席が設営され、2018年度からは来訪者に場の景観の再解釈を促すプログラムとして、琵琶湖疎水沿道や岡崎公園など他地域の公共空地での催しも展開するようになる。同年より茶道部のつながりで参加していた学生のおつてから、大学でまちづくりを学ぶサークルの学生も参加し、学生のアイデアから中国茶文化を活用した景観鑑賞やMAPづくりなどの新たな取り組みも行われるようになった。

学生のマネジメントの特徴としては、茶の湯や建築などの学生の関心を活用する組織と、親水空間や景観形成など地域住民の認識する課題を考える組織が別に立ち上がり、双方に参加しているメンバーがコーディネート役を担っていたことが挙げられる。文化プログラムの実施を目的とした「白川あかり茶の湯の会」（2014年発足）の他、粟田学区については、自治連合会の下部組織として活動した「白川を創る会」（2012年発足、2017年に「白川まちづくり協議会」発足にあたって解散）、岡崎エリアについては景観づくりを目的とした「水車の竹中みち実行委員会」（2015年発足、2018年に解

散)という、地域住民を核とした課題特化型の任意団体が存在し、双方に参加しているメンバーが地域住民やその認識する課題と学生活動のつなぎ役を担った。

### 3-3 行政施策との関わり

以上のような学生が参画した活動と行政施策との関係構築の背景には、はじめに述べた「大学地域連携創造・支援事業」の存在がある。2012年度、2014年度に行われたワークショップでは地域住民と学生の連携活動や、複数の所属の学生の連携の展望が進められ、これらの活動には同事業の助成が活用された<sup>9</sup>。また、2015年度、2016年度には複数の大学の茶道部学生が中心となって地域住民と連携した派生的なまちづくり活動において、同事業の助成が用いられた<sup>10</sup>。

大学地域連携創造・支援事業の他、資金面では、行政の施策として左京区が実施している「まちづくり活動支援交付金」や京都府が実施している「地域力再生プロジェクト支援事業交付金」が活用されている。事務局によると、このような施策を活用することで、資金面だけではなく公益的な取り組みとしてお墨付きが得られることが重要であるという。特に行政が管理する河川、道路、公園などの使用許可を事務局側が得るために、自治体公認の活動であることが不可欠なのだ。さらに、2019年からは京都市主催の芸術祭ニュー・ブランシュ京都の一企画として実施できるようになるなど、文化政策が公共空地の利用の面で大きな支援となっている。

### 3-4 小結

「白川あかり茶の湯」においては、学生と地域住民が協働するまちづくり活動を通して、プログラムの意義の明確化や、意義に沿った新たな文化プロ

---

<sup>9</sup> 2012年度「京都白川水上空間の交流作りワークショップ」（まちxLabo 主催）、及び2014年度「地域の魅力的な生活文化空間発見x茶の湯のもてなし発信」（花園大学茶道部和敬會主催）

<sup>10</sup> 2015年度「栗田口茶の湯のまちづくり」（おちゃのこ会主催）、2016年度「白川みんなの地藏盆」（おちゃのこ会主催）

グラムが構築されていた。その過程においては、住民が学生の活動を自分たちの地域の課題とつながりがあるものとして捉え、学生の都市への包摂を重視する行政の考えと支援があったことも重要な点であろう。「三条あかり景色」と同様に、ここでも学生を文化プロジェクトの担い手たらしめた背景には、文化政策ではなく大学生を対象とした都市政策の影響があることが指摘できる。

他方で、市民が公共空地で文化活動を行うにあたり、その空地を管理している部局が直接その事業を支援する状況にはない。大学政策、まちづくり政策、文化政策等の部局が市民の文化活動の公益性を認め、管理部局に許可が得られるような体制が必要となる。ナントの事例のように、芸術祭などの文化プロジェクトは、部局横断的に都市空間の柔軟な活用を促す機能を持つ。市民や学生を積極的にアクターとするような芸術祭の運営について、今後その意義を検討する必要があるだろう。

## 4 崇仁新町における学生のマネジメント

### 4-1 プロジェクトの成立背景

市民主導のプロジェクトであった前節までのプロジェクトに対し、崇仁新町は民間企業の主導による。2014年に京都市は京都立芸術大学（以下「芸大」）を京都駅東部エリア（崇仁学区）に移転することを決定した。これを契機に「創造・交流・賑わい」を進めることを目的としてエリアマネジメント組織が同地区に創設される。そこで、コミュニティスペースとしての夜市の事業を考えていた民間事業者が、エリアマネジメント組織<sup>11</sup>のにぎわい創出の部門と連携して、一般社団法人「渉成楽市洛座」を設立した。この同法人が、崇仁新町プロジェクトの運営団体である。

同プロジェクトでは2018年の2月から2年半、16店舗が営業される屋台

---

<sup>11</sup> エリアマネジメント組織には「歴史文化景観部会」「医療福祉部会」「にぎわい創出部会（崇仁新町の企画・運営）」の3つの部会が設置された。



写真 5-3 崇仁新町の様子(写真提供:小久保率氏)

村が設置された。京都市は土地を無償で提供する代わりに、事業として地域と芸術が交わる文化交流の拠点として運営されることを条件とし、地域、大学・行政・民間の四者の連携が行われた。芸大の移転とこれに伴う芸大生の活動のイメージを地域に認知してもらうことを趣旨として、芸大生のプロジェクトが組み込まれた。

#### 4-2 プロジェクトにおける学生のマネジメント

同プロジェクトでは、学生参画の工夫としてプロジェクトを推進するための業務領域を「アート」「デザイン」「ビジネス」「サポーター」「コミュニティ」「ソーシャル」の6分野に分け、それぞれの領域のスペシャリストが雇用され、そこに参画する学生のマネジメントが行われた。芸大生が企画段階から加わり、スペシャリストが企画の事業化を図る体制で、芸大生の意欲の維持と事業としての実現を担保したことが崇仁新町の特徴的な点である。

崇仁新町の空間は暫定的な土地利用ということでコンテナ10台を使って構成され、その基本的なランドスケープ、交流スペース等の設計段階から芸大生が参画している。その他、イベントとしてのアートマーケット、会場のシンボルとなる神輿の作成など、期間中に学生が企画する多様なプログラ

ムが実施された。京都市立芸術大学には、学生が提案してプロジェクトを実施することを目的とした授業があり、そのような枠組みも活用して大学も協力する形で学生がプロジェクトに参画した。それを通して国内・海外のアーティストとの交流が行われたことも、学生参加の動機付けになった。

### 4-3 行政施策との関わり

崇仁地区はかつて狭い路地に衛生状態が良くない木造住宅が密集していた地域で、京都市が戦後住宅地区改良法を適用し改良住宅<sup>12</sup>の建設を進めてきた。1996年から地元まちづくり組織と京都市が協働して「崇仁まちづくり推進委員会」を設置し、域内を流れる高瀬川の流路を変更するなど生活環境の改善を行ってきた。しかし、2010年の時点で用地買収の難航等から改良事業完了の目処が立たず、「京都駅に隣接し発展の可能性がありながら、フェンスで囲われた空き地が目立つ、まとまりと活気を失った状態」<sup>13</sup>であった。

そのような状況下で、2009年に「京都市崇仁地区将来ビジョン検討委員会」が設置され、同委員会により2010年策定された「京都市崇仁地区将来ビジョン検討委員会報告書」において、将来ビジョンとして「創造・交流・賑わいのまち～人と地域をつなぐまちづくり～」が掲げられた。これにそったエリアマネジメントの構築と事業の早期完了が不可欠であることから、土地区画整理事業を導入することが提言された。

また、同報告書の中では目指すべきビジョンの一つとして創造都市政策が挙げられ、都市計画の他、環境、文化・芸術・産業、福祉などの多方面の行政施策に深く関わる行政の推進体制を確立することが提言されるなど、創造都市の創出に向けた多様な主体の包摂がその趣旨には含まれていた。提案の中には、大学のサテライト誘致の可能性も挙げられている<sup>14</sup>。

<sup>12</sup> 公的賃貸住宅の一種で、対象地区内に存在する特定の住宅を地方自治体を買取り、新たな住宅に建て替えたのちに元の住人に低額にて貸与する。

<sup>13</sup> 京都市崇仁地区将来ビジョン検討委員会「京都市崇仁地区将来ビジョン検討委員会報告書」（2000年7月策定）

<sup>14</sup> 「将来的に地域のイメージとなり、人々が訪れたいくなる求心力のある施設機能等



以上のことから、住宅改理事業ではなく土地整理事業として進めることで事業用地を集約し、公共施設を整備する形での土地利用が可能となり、2014年に京都市立芸術大学の移転が発表される。同年には、前述した「京都市立芸術大学を核とした崇仁エリアマネジメント」組織が発足した。この組織によって、エリアのにぎわい創出を目的として芸大の移転予定地である京都市保有の遊休地を暫定利用し、賑わい創出と合わせて地域住民が移転する大学を受け入れる下地づくりを企図した崇仁新町プロジェクトが検討されることとなる。

さらに、京都市立芸術大学の移転整備を機に、2017年に策定された行政計画<sup>15</sup>において崇仁地区の南、京都駅の東南部に位置する「京都駅東南部エリア」についても「文化芸術によるまちづくり」の視点と、「日本の文化芸術を牽引し、世界の人々を魅了する創造環境の整備」や「若者の移住・定住促進とまちづくりの担い手育成」といった方針が示される。このような方針を基に、京都市は2020年に同エリアの都市計画の見直しを行い、文化芸術の施設立地の誘導を意図した独自の用途地域変更を行っている<sup>16</sup>。

#### 4-4 小結

「崇仁新町プロジェクト」は、創造都市の創設を視野に入れたエリアマネジメントが求められた地域において、芸術大学移転を伴う区画整理が実現

---

については、どのような地域機能や都市施設が良いか、本ビジョンでの段階では特定できないが、例えば、大学のサテライトや、創造的人材が集まるアトリエやスタジオ等と、それらが住宅と一体となったSOHO機能、遊歩道沿いの賑わいを創設するイベントや商業、観光関連等の施設機能の導入が考えられる」（京都市崇仁地区将来ビジョン検討委員会 2000）。

<sup>15</sup> 「京都駅東南部エリア活性化方針」（2017年3月京都市策定）

<sup>16</sup> 「文化芸術の牽引」、「創造環境の整備」、「若者を中心とした多様な賑わい」等を目的とする河原町通以東エリアについては、これまで「住居地域」であったものを「近隣商業地域」として、これまで制限されていた劇場等の文化芸術施設の建設を可能とした。併せて「特別用途地区」を重ねて指定し、文化芸術の創造発信のために必要な用途や、若者・芸術家の移住・定住促進のために必要な用途以外の用途について容積率を低く設定する等、文化芸術施設と賑わい施設の複合や、文化芸術施設を併設した共同住宅等を誘導するための制限が設けられた。

し、将来にわたって同地に芸大生がアクターとして関わり続けるための地域のマネジメントの必要性から、民間企業の提案が行政に採択された事業といえるだろう。

一連の流れは全体として企図されたものではないだろうが、結果としてこれまでの章で触れてきたフランスの過渡期の都市計画の手法と重なるプロセスが踏まれていることが興味深い。過渡期の都市計画は産業遺構や低・未利用地の再開発に先駆けて行政が遺構や空地に暫定的な文化プロジェクトを挿入し、将来の住民や関係者をそこに包摂しつつ再開発の方向性を探る手法である。芸術大学の設計計画は崇仁新町が設置された時点で完成されているなど、プロセスとして前後する部分はあるが、芸術大学を含むより広いエリアで都市計画まで含めた意思決定が進められており、複数の行政セクターや民間セクターの連携によって、プロセスの中に文化プロジェクトの流動性を取り入れた再開発が実現している事例と言えるだろう。

## 5 おわりに

本章では、京都における市民主導のまちづくりにおいて、特に芸術文化の創造性をその活動趣旨に含み、また企画・運営面で学生が参画したプロジェクトについて検証を行った。三つのプロジェクトを通して、まちづくりプロジェクトに学生を組み込む過程において、行政の進めている大学政策が大きく関係していることが確認された。

「三条あかり景色」「白川あかり茶の湯」においては、大学政策として行われていた学生による文化活動の組織化や、まちづくりへの参画への支援施策が、文化活動によって学生を地域課題の解決を図るまちづくりの担い手として育成することにつながっている。崇仁地区においては、創造都市に向けた再開発の視点の中で芸術大学の誘致が検討され、民間による文化プロジェクトを活用しながら、移転してくる学生と地域との関係構築が図られている。このような事例からは、1990年代から文化芸術の担い手として学生を捉え、魅力的なまちづくりにつなげようと試みてきた大学政策において、文化芸術基本法で推奨される文化芸術による政策横断的な視点が既

に含まれていたことが指摘できる。

文化政策を進める中で都市再生を牽引する文化プロジェクトの手法が分野横断的に波及し、その担い手が育っているナントの事例と比較するならば、京都においては大学・学生が数多く立地することを都市の強みと捉えることができる。京都市において文化政策ではなく大学政策として文化・芸術の担い手として学生を涵養する施策が行われたことは、市民活動としてのまちづくりと学生が結びつき、都市再生の視点を持った文化プログラムの担い手が現れたことの重要な政策上の背景である。

#### 〔参考文献〕

京都市崇仁地区将来ビジョン検討委員会（2010）「京都市崇仁地区将来ビジョン検討委員会報告書」

楽洛まちぶら会（2005）「三条あかり景色 2004」



## おわりに

本研究ではナントと京都の事例を基に、芸術文化の創造性を活かした都市再生に向けて、文化プロジェクトにおける担い手育成の手法について考察を行った。

ナントの取り組みからは、まずエロー市長の強力なイニシアティブがあり、政治的な都市政策のビジョンがあつてそのための手法として文化セクターによる文化プログラムが展開されている。文化プロジェクトが牽引する形で都市のビジョンが共有され、各々の行政セクターともつながる横断的な都市開発が動き始めた。このような都市での取り組みとともに、公教育の場である国立建築大学でその理論化が進められ、学生の実践を伴う教育プログラムが成立したことが確認された。

京都の取り組みからは、市民主導の文化プロジェクトを通してこれまでとは異なる都市空間の解釈を提案する動きがあり、その中で学生を含む新たな活動者を地域に組み込んだ取り組みが行われている。行政側はこれに対し、土地の利用許可、活動の公益性に応じた助成の交付、都市計画の変更など、各セクターの裁量の範囲で支援や推進を行なっていることが確認できた。このような動きは「国や自治体主導の地域づくりに対し、市民や地域住民の視点や意見を反映させるための地域づくりの取り組み」という点において、日本の「まちづくり」の系譜にあると考えられる。

京都ではナントのような文化政策の視点から横断型の政策が行われたわけではないが、創造都市を育てている一つ重要な視点として1990年代からの大学政策の中で、文化・芸術の担い手として学生を涵養し、まちづくりにつなげる方針が示され、様々な施策が行われていたことが指摘できる。文化芸術政策の方面からもまちづくりの担い手が求められる現在において、住民と学生が協働で取り組むための土壌が作られてきたことは、都市の大きなアドバンテージになるだろう。一面的であるかもしれないが、このような視点で見ると、政策が牽引する形で担い手が育ってきたナントと、政策として担い手育成が進められる中で、まちづくりとしての連携やプロジェクトが生まれてきた京都は対照的である。

本冊子には収録できなかったが、シンポジウムの第三部では文化プロジェクトに関連する制度化の課題についても議論が行われた。制度化に寄りすぎると、都市計画における国の権限が強い日本の場合、地域の個性に応じた都市の独自の使いこなしに課題が出てくことや、長期的視点が持ちにくいことが課題としてあがった。フランスからは制度化によって、新しい実験が受け入れられなくなる懸念から、手法を硬直化させないようにアーティストに良い環境と新しい実験をしてもらえる場を考えていく必要性が提起された。文化プロジェクトの主役が日本の場合には市民によるまちづくり、フランスの場合はアーティストに置かれていることを考えると、この二つの問いには共通の問題意識が持たれているといえるだろう。

本研究のキーワードの一つともいえるフランスの「過渡期の都市計画」の起源としては、1960年代からのスクワット運動の影響が指摘されている。元々は未利用施設を居住困難者の居住地に転ずる社会運動から、1980年代には芸術家による未利用空間の転用を提案する意図を持ったスクワット（違法や無断の占拠）が発生し、2000年代にスクワットを合法的に包摂する政治的な動きが発生する。このような動きを見ると「過渡期の都市計画」はいわば「官製スクワット」とも捉えることができよう。政府の提示する土地利用に対し、芸術家、すなわち市民の側から代替案が提示・実践され、これが社会的に受け入れられていく過程が、都市計画の技法として受容されていく。

このような動きについて、著者らには国主導の計画に対する反対運動から生まれ、現在では都市政策の重要な要素になっている日本の「まちづくり」の用語が重なって見える。都市が創造的であるためには、行政と市民の間に一定の緊張感が存在し、互いに影響を与えながら絶えず関係を変化させていくことが必要なのではなかろうか。

最後に、シンポジウムにご登壇いただいた講演者の皆様、参加者の皆様、シンポジウムの通訳としてご協力いただいたシッシェ由紀子さん、シンポジウムの共催を含め多大なご支援をいただいたアンスティチュ・フランセ関西の皆様、通訳に加え現地調査において多大なサポートと研究に対する

刺激を与えてくれる高田祐輔さん、調査の過程でご協力いただいた方々、大阪市立大学都市研究プラザの先生方、スタッフの皆様はこの場を借りて御礼申し上げます。

なおこの研究で用いるナントの事例研究に関しては、J S P S 科研費基盤 (C) 18K01198「都市の記憶をめぐる創造と実践：芸術祭を通じた市民社会の形成に関する人類学的研究」（代表者：越智郁乃、東北大学）及び、大林財団研究助成事業「文化政策と都市計画の連携を図る職能の展望：フランスにおける都市のセノグラフ概念を題材に」（代表者：川崎修良、長崎県立大学）における研究成果を含むこと、シンポジウムの運営にあたっては京都府文化力チャレンジ補助金の支援をいただいたことを付記する。

2021年1月31日 川崎修良・越智郁乃





## 先端的都市研究拠点「共同利用・共同研究拠点」事業について

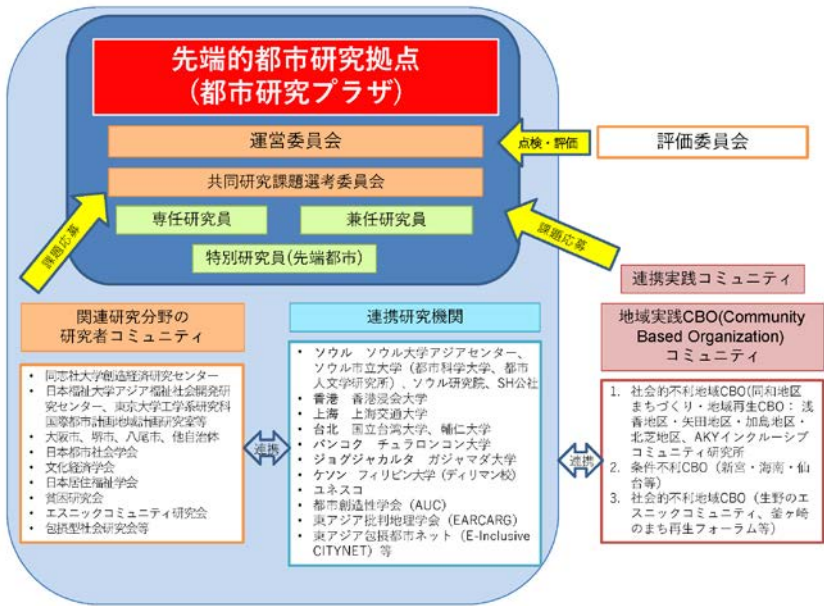
共同利用・共同研究拠点事業は、大学等から研究者が集まり、共同利用・共同研究を行う「全国共同利用」のシステムです。2020年度に文部科学省に拠点として認定されていた研究機関は、国立大学67、公立大学9、私立大学18、ネットワーク6の合計100箇所に及びます。

大阪市立大学は、建学の精神「大学は都市とともにあり、都市は大学とともにある」を受け継ぎ、「都市を学問創造の場としてとらえ、都市の諸問題に英知を結集して正面から取り組み、教育及び研究の成果を都市と市民に還元し、地域社会及び国際社会の発展に寄与してきました。市民のみなさんとともに、都市の文化、経済、産業、医療などの諸機能の向上を図り、真の豊かさの実現をめざす」ことを理念に掲げ、都市や地域の研究に対する総合的かつ学際的な都市研究の領域を領導してきました。教育の基本方針も「都市・大阪を背景とした市民の大学という理念に立脚」するとしています。

本学の建学精神を基礎とする都市研究プラザ（以下、URP）は、グローバルCOE「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」（2007年度～2011年度）を推進し、独自に築いた海外センター・海外オフィスを始めとする国際的な研究者コミュニティのネットワークとの協力の下、文化創造と社会的包摂、アートによる災害復興等、学際的かつ広範囲の分野に渡る研究実績を重ねてきました。これまでの国際的な地域連携型学知と実践知のプラットフォームによる研究活動の蓄積によって育まれた、国内外の包摂型現場ネットワーク、幅広い域外・越境ネットワークの活用による共同研究活動を最大限活かすべく、2014年度により「共同利用・共同研究拠点」として認定されています。

本事業では、これまで蓄積してきた研究や学術資源を、さらに地域や一般社会、かつ連携研究機関と共有・協力していくプロセスを重視し、各連携研究機関が積み上げてきた都市研究における先端的取り組みをスケールアップしていくための連携型拠点として整備を図っていきます。これらの取り組みを通じ、世界及びアジアの都市をフィールドに据え、文化創造と社会包摂に資する先端的都市論を構築する共同研究と研究拠点の形成を行う中で、

「21世紀型のレジリエント（復元力に富んだ）都市」のあるべき理念モデルと実践モデルを彫琢していくことが期待されています。



### 2020 年度公募型共同研究採択課題

代表者	研究テーマ
網中 孝幸 (EAICNジャパン)	東アジアインクルーシブ都市ネットワークの構築に向けた都市間の経験交流
森口 由佳子 (関西福祉科学大学)	地域共同のまちづくりによる社会的不利地域の再生に向けたアクションリサーチ
日高 真吾 (国立民族学博物館)	被災地芸能の文化的脈絡の拡張—虎舞(岩手県)を事例として
川崎 修良 (長崎県立大学)	創造的都市再生の試みにおける学生の包摂手法の研究—京都における芸術文化の創造性を活かした市民主導のまちづくりプロジェクトを題材に
山北 輝裕 (日本大学)	現代日本における矯正教育の批判的検討—都市を生きるその後の人生
陸 麗君 (福岡県立大学)	感染症パンデミック危機状況下における外国人の居住と経済活動の現状と課題
ヨハネス キーナー (埼玉大学)	サービスハブにおける危機とイノベーションのダイナミクスに関する国際比較研究

## ■著者紹介（執筆順）

川崎修良（かわさき・のぶよし）

編者、はじめに、第1章、第3章、第4章、第5章、おわりに執筆。長崎県立大学准教授。博士（人間・環境学）。専門は建築学、都市計画学。

越智郁乃（おち・いくの）

編者、第5章、おわりに執筆。東北大学大学院文学研究科准教授。博士（学術）。専門は文化人類学、民俗学。

Emmanuelle Gangloff（エマニュエル・ガングロフ）

第2章執筆。グルノーブル・アルプ大学アルプ都市計画学・地理学研究所 PACTE 研究機関研究・ナント国立建築大学 AAU-CRENAU 研究所研究員。専門はアート、都市整備、都市研究。

高田祐輔（たかた・ゆうすけ）

第2章翻訳。Urbappro 主催（通訳、日仏交流コーディネーター）。修士（パリ第12大学、都市計画学）。専門は住宅、都市のアートプロジェクト。

**URP 先端的都市研究シリーズ 24**

創造都市における文化プロジェクトと担い手育成  
—フランス・ナント市と京都市を例に

---

2021年3月15日 初版第1刷発行

編者 川崎修良・越智郁乃

発行者 大阪市立大学都市研究プラザ

〒558-8585

大阪市住吉区杉本 3-3-138

電話 06(6605)2071 FAX 06(6605)2069

---

ISBN 978-4-904010-39-6

©2021 N. Kawasaki & I.Ochi

Printed in Japan